昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和47年11月1日発行毎月1回1日発行

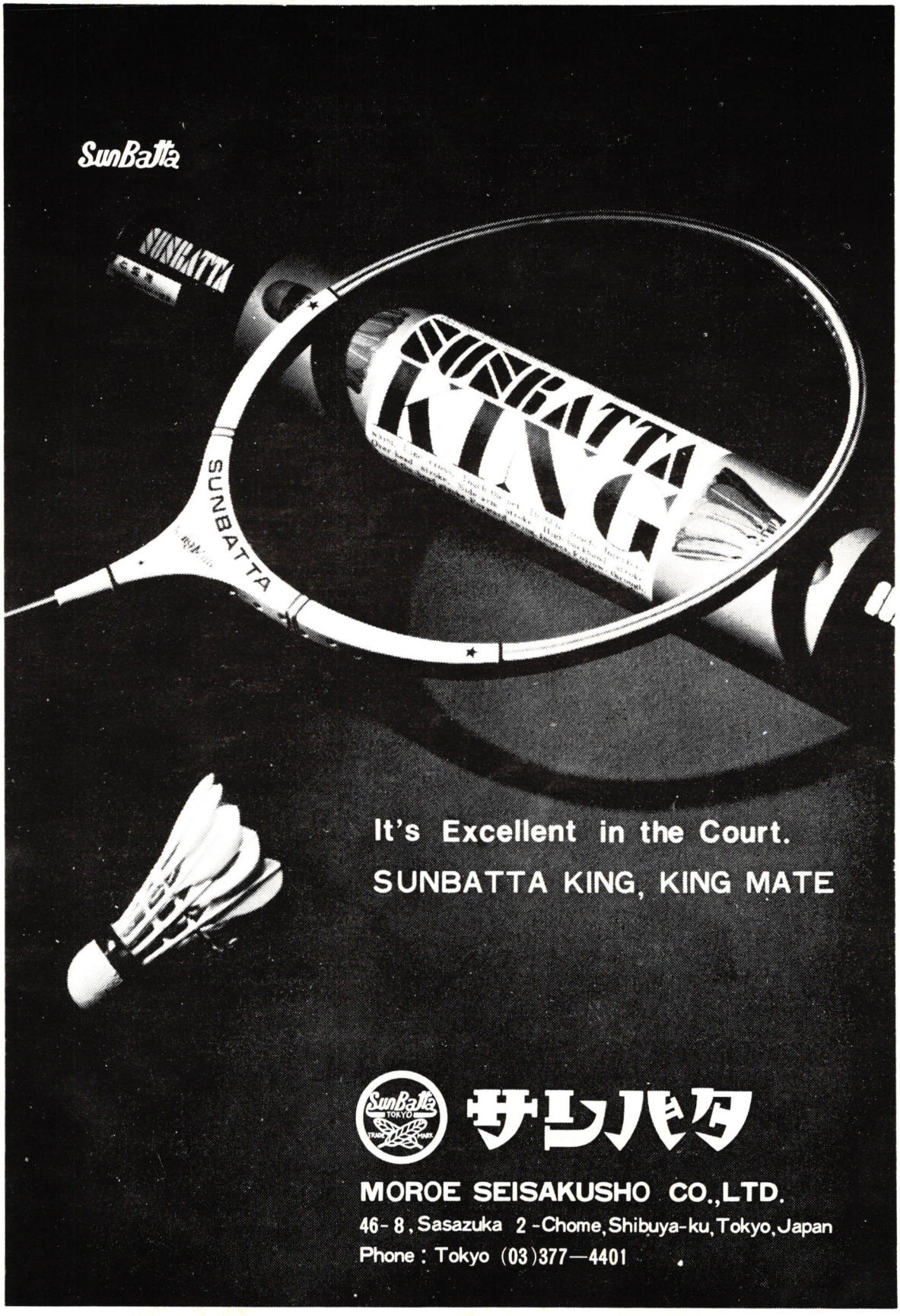
日本バドミントン協会

# バドミントン界

# THE BADMINTON WORLD

38 NOVEMBER 1972




SunBatta
SUNBATTA
SUNBATTA KING
SUNBATTA
It's Excellent in the Court.
SUNBATTA KING, KING MATE
SunBatta TOKYO
サンバタ
MOROE SEISAKUSHO CO.,LTD.
46-8, Sasazuka 2-Chome, Shibuya-ku, Tokyo, Japan
Phone : Tokyo (03)377—4401

# 今月号のダイジェスト




ミュンヘン五輪のスナップから，中山（左）湯木選手。
インド茶のパラソルあり、ここは選手村の喫茶店前です。

今月号は中国関係に力を入れた。おかげで材料の集るのが遅くなり、申しわけないことになってしまった。

**★日中交流実現へ、新春早々にも協定か**　一年以上も、どうなるのかわからず、宙ぶらりん状態だった中国とのバドミントン交流が、ようやく実現の運びとなった。十月に訪日した中国バレーボール代表団幹部（中華全国体育総会の幹部）と日本協会代表が何度か話し合った結果、日本が文書で正式に交流のための申し入れをし、中国側が協力を約束したもので、恐らく正月中には、交流協定を結ぶための連絡が来るだろう。

本欄では、そのあらましのほか、中国のスポーツ界、バドミントン事情、日本スポーツ界の態度、国際関係資料などを紹介した。

**★お先きに失礼、もう交流をやってます**　IBF規定で禁止条項がないだけに、バドミントンの日中交流は、日本が決意さえすれば楽だが、中国との話し合いが、まだ糸口だけついたところ、日本はすでにネパールに遠征、国際競技会の舞台で中国のナショナル・チームとラケットを交えた。中国が圧倒的な強さを見せたが、ここでは、中国バドミントンの特色、選手の氏名外務省への大使館からの報告などをとり上げた。

**★中国チーム、カナダ遠征記**　中国チームは実はすでに一年前、カナダに遠征して、全国数都市で大歓迎を受け、その強さを見せつけている。このときのもようを、カナダのベテラン選手がまとめているので、それを紹介してみる。

★一月下旬から、欧州女子のスターを数人招待、東京ほか3都市で国際競技会が開かれる。予定メンバーと日程がわかったので、今後の日本協会の施策なども含め、お知らせした。

**★敗軍の将も兵を語る**　前号で報じた卜杯のあとしまつ記。責任者・競技力向上委員長の手記に加え、今後のための提案を載せた。

## バドミントン界〈47年11月号〉

### 特集　日中交流と中国バドミントン


**【1】日中交流実現へ**……12
- 両国の話し合い煮つまる、新春にも調印か
- 中国スポーツ界とバドミントン
- 中国スポーツ組織と現状
- 日本体協なども「中国は北京」を認める
- 前途の難問は国際規定の〝禁止〟条項
- 中国と台湾のIF加盟状況リスト

**【2】お先に失礼、日中交流すでに実施**……2
- 強かった中国選手、ネパール国際競技会報告
- ネットとスマッシュに特色、中国のプレー
- 女子は日本が優位　・中国選手一覧
- ハンデ背負った日本、中国製シャトルに不慣れ
- 国際親善の実大いにあがる——大使館報告

**【3】中国選手印象記　カナダ遠征から**……6

☆　☆　☆　☆　☆

◇一月に欧州女子と国際競技会　日程など決まる……8
〈日本協会、国際競技開催にようやく本腰〉
◇トマス杯あとしまつ……34
・敗軍の将あえて兵を語る
・前進のために六つの提案
◇世界男子招待選手権大会、ハルトノ優勝……36
◇写真グラフ　ミュンヘン五輪スナップ
・百万人のバドミントン上達法……26　・大会運営規定百問……32
・百万人のトレーニング入門……30　・よく使はれる用語……33
・北から南から……36　・今月のことば……40



スタッフ／表紙撮影・松井亮麿／同製作・小浜正道／グラフ写真ほか・山田真市、川端昇市／イラスト・秦　浩／編集・明本薫／庶務・本島道子／協力・日本協会事務局、各加盟団体関係者、愛読者

# ひと足お先に、日中が対戦

## ネパール・故マヘンドラ国王記念国際親善バドミントン大会

〝お先に失礼〟――日中のバドミントン交流が、しだいに実現に近づきつつあった十月初め、正式協定を待たず、両国選手がヒマラヤのふもと、ネパールでシャトルを打ちかわした。もちろん、直接の交流ではなく、ネパール国の招待による日・中・ネパール三カ国の国際親善の舞台。

しかし、対戦の事実には変わりなく、両国が正式の試合で顔を合わせたのは、史上初めての画期的なこととなった。これにより、これまで〝未知のベール〟に包まれていた中国の力、その世界の門口をのぞくことはできたわけで〝男女とも世界一〟をめざす日本にとって、大きな収穫となった。

本号では、選手のレポートを中心に、いくつかの角度から大会を追い、中国紹介の一端としてみた。

# 中国強し、鈴木決勝で涙のむ

## 木戸健闘、混合ダブルスに栄冠

ネパール国の故マヘンドラ国王記念国際親善バドミントン大会は、十月四日から、同国の首都カトマンズで、一週間にわたって行なわれた。

参加国は地元ネパールのほか中国、日本の三カ国。日本からは、ちょうどこの時期がト杯の対マレーシア戦に当たったためナショナル・チームを派遣することが不可能となり、結局〝準ナショナル・チーム〟ともいうべきランクの鈴木健二（電電東京）関一誠（早大職員）宮川秀樹（河崎ラケット）木戸純一（ヨネヤマラケット）の四選手を送った。

中国からは男子七、女子四、計十一人のナショナル・プレーヤーが参加した。文革後、再出発して間もない中国は予想よりも手ごわく、日中初の対戦となった男子シングルス2回戦で、早くも木戸、宮川、関が敗退。残った鈴木もついに決勝でナンバーワン侯加昌にストレート負けした。

またダブルスも鈴木・木戸組が準決勝で侯加昌・湯仙虎組に力及ばず涙をのんだ。しかし、混合ダブルスでは、木戸がネパールのパンデ嬢と組んでよくがんばり、劉暁征、S・シンという中国・ネパールのコンビをフルゲームのすえ、突き放し、優勝を飾った。

中国チームの名前は別記の通りで、文革前からのベテランも多いが、ある点で日本をしのぐ強さを持つことは、これでほぼ判明したといえよう。とくに男子にとっては、マレーシア、インドネシアのほかに、もう一つ強敵をむこうにまわすことになり、一層の奮起が望まれるわけである。

また、勝敗はともかく、この大会を通じ日本と中国、ネパール間の国際親善が一層深まったことは特筆すべきで、代表選手団のご苦労をねぎらいたい。

◇…男子シングルス…◇

▽1回戦

木戸純一（ヨネヤマ）15―1 15―2（ネ）ラヤマジ

宮川秀樹（カワサキ）15―2 15―3（ネ）アマツア

関　一誠（早大職員）15―5 15―2（ネ）S・B・シン

鈴木健二（電電東京）15―2 15―0（ネ）R・B・シン

▽2回戦

庾　妖東（中）15―8 15―6（日）木戸純一

陳　新輝（中）15―9 15―6（日）宮川秀樹

呉　俊盛（中）15―5 15―11（日）関　一誠


中国選手団との記念撮影

鈴木健二（日） 15—1 15—9 K・B・シン（ネ）

▽準々決勝

侯 加昌（中） 15—7 15—6 庾 妖東

プルショタム・K・C（ネ） 15—8 15—5 陳 新輝（中）

呉 俊盛（中） 15—12 15—13 湯 仙虎（中）

鈴木健二（日） 15—12 15—13 陳 添祥（中）

▽準決勝

侯 加昌（中） 15—5 15—6 プルショタム・K・C（ネ）

鈴木健二（日） 15—12 15—13 呉 俊盛（中）

▽決 勝

侯 加昌（中） 15—6 15—5 鈴木健二（日）

◇…男子ダブルス…◇

▽1回戦

鈴木、木戸（日） 15—0 15—2 タパ、ビアス（ネ）

▽2回戦

鈴木、木戸（日） 15—11 15—8 K・シン、プルショタム・K・C

陳新輝、庾妖東（中） 15—7 15—7 関、宮川（日）

▽準決勝

侯加昌、湯仙虎（中） 15—4 15—6 鈴木、木戸（日）

パイアラム・K・C、G・M・シン（ネ） 不 明 陳新輝、庾妖東（中）

▽決 勝

侯加昌、湯仙虎（中） 不 明 バイアラムシン（ネ）

◇…混合ダブルス…◇

▽1回戦

アディカプト（ネ）方凱祥（中） 15—5 15—11 マスカイ（ネ）宮川（日）

パンデ（ネ）木戸（日） 18—16 15—11 梁慧玲（中）プルショタム・K・C

▽準決勝

劉暁征（中）S・シン（ネ） 18—17 15—9 15—10 15—11 アディカプト、方凱祥

パンデ木戸 15—9 15—11 許慧玲（中）K・シン（ネ）

▽決 勝

パンデ木戸 15—11 15—12 15—8 劉暁征S・シン

# スマッシュ、ネットプレーに特色

## 印象的だったスピードとパワー

## 選手団報告

ネパール政府から国際親善トーナメントに招待され、参加した中国チームは、選手、役員合わせて十七人もいた。

われわれは、たった四人、役員ゼロで、ちょっとさびしい気もしたけれども、四人とも全力で中国選手と試合をやった。以下、初めての中国勢と対戦して感じたことを要約、報告する。

**○クリア** ハイクリアとドリブン・クリア的な打ち方で、両サイドに打ち込む。打点、フォームはカット、スマッシュの打ち方と同じである。

**○ドロップ** あまり使わず、両サイド・サービスラインまで伸びてくる。スマッシュ・カットで取れそうであるが、それがスマッシュにも、クリアにも感じられるので、ラケットを無意識のうちに出してレシーブしてしまう。打点が非常に高く、時にはジャンプをして打って来ることもあるので、なおいっそう無意識にラケットが出てしまうのである。

**○スマッシュ** だいたい、早くて軽いスマッシュに感じた。コースはカットと同じく両サイドに打ち込むのが多く、ジャンピング・スマッシュで打つので一瞬、どちらに打って来るのかわからず、迷うことがある。

わかりやすくいえば、バレーのスパイクのように、空中でエ

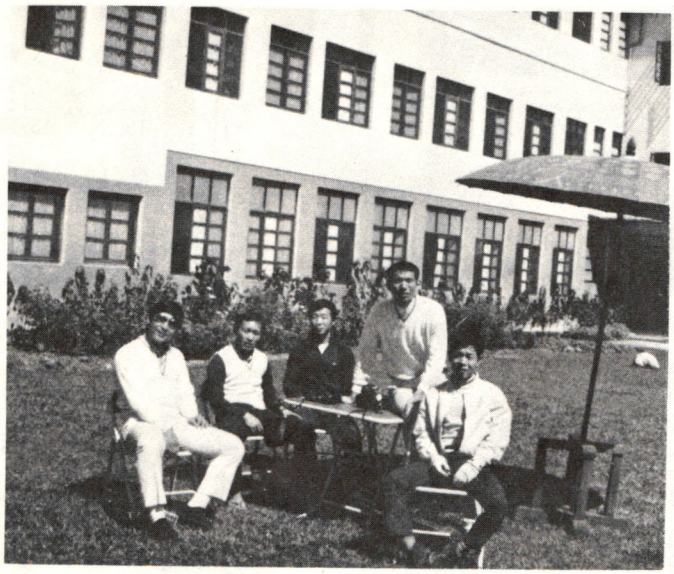
ビのようにそり、その反動でスマッシュを打っていた。（この打ち方は、われわれも考えていたが、そうした体勢で打つと、どうしても前に出るのが遅くなるので、あまり使わなかった）

中国選手は、その打ち方でも体のバランスをくずさず、次の体勢にはいるのが早かった。こちらがドリブン・クリアを打つと、いいカモにされた感じであった。

**○ネットプレー**　ネット上方で、シャクるような感じで、シャトルに回転を与え、球威を殺すだけでなく、攻撃球として変化させているように感じた。

こちらが上げるにも、相手球が回転しているので、ネット上では打てない。シャトルの回転が元に戻るまで待たなければならず、そうすると、どうしてもネットの下の方で打たざるを得なくなってしまった。

**○結論**　中国選手のプレーはスマッシュとネットのパワーがすばらしいことが、きわめて印象的であった。



ネパール選手団とのスナップ

## 女子は日本優位か

### 帰国の選手団語る

帰国した四選手は、中国選手のプレーについて「スピードとパワーを主体にした強力なものだ。日中の戦力をくらべたら男子は中国、女子は日本に分があるだろう」と次のように印象を語った。

中国のプレーの特徴は、日本選手のようにこまかい技術を使った、変化に富んだものではなく、ジャンプして打つスマッシュとネットプレーを主にした単調なもの。しかし、テンポの早いラリーが続くので、見た目にはスリルがあって楽しい、という。この傾向は、タマ足が速い中国製のシャトルコックの性質が原因となっているとも見られている。

結果は大差の敗北だったが、「向こうのスピード・プレーに慣れれば、ほぼ対等に戦えそうだ」というのが、日本選手の一致した見方。女子は、さほどのスピードはないので、世界チャンピオンの日本チームなら、中国に勝てそうだという。

（10月19日・読売新聞）

## 中国製シャトルでハンデ

### ネパール・コーチの山本君から手紙

ネパールのコーチとして滞在中の山本次生氏（慶大出）から日本協会・村山事務局長あて、次のような便りが届いた。

×　×　×

（前略）ネパール・バドミントン協会、ナショナル・スポーツ省のスタッフも、日本チームのため、特別パーティを開き、席上「アジアの誇る日本が遠路参加してくれたことを心から感謝している。この大会が盛り上ったのも、日本チームが一つ一つのゲームを真剣にやってくれたからだ。今後も若いネパールバドミントンのため、よろしくご指導願いたい」と語っていました。

中国側も日本チームのため大使館でレセプションを開いてくれるほどでした。これも鈴木さん（選手）たちの印象がよかったからだと思います。

中国チームを迎えに飛行場に行き、五時間も待っていてくれたり、中国選手とノートと鉛筆を手に、漢字を書いての語り合いをしたり、大変なハードスケジュールにもかかわらず、常ににこやかに親しく、まわりの人に接しておられ、大変、好感を持たれたようです。

ゲームの方は中国チームが圧倒的な強さで、終始、余裕を持ち〝友好第一〟をかかげながらも、素晴らしい強さを見せておりました。

とにかくスピード、スタミナパワーと完ぺきに近いものと思います。日本選手にとっては羽根が中国製のものであり、それに慣れていなかったことが残念だと思います。

### 中国選手氏名

今度の大会に出場した中国選手の氏名（順序は国内ランキング順といわれる）次の通り。

〔男子〕▽侯加昌（30歳）▽湯仙虎（30歳）▽方凱祥（32歳）▽陳添祥（28歳）▽呉俊盛（36歳）▽陳新輝（20歳）▽庾妖東（20歳）

〔女子〕▽陳玉娘（26歳）▽劉暁征（26歳）▽梁秋雫（22歳）▽許慧玲（22歳）

文革の影響で、それ以前からのベテランが、活躍している。

**大会はきわめて有意義であった、と根本大使も感激――日本、中国、ネパールの三国代表が初めて顔を合わせたバドミントン大会について、さっそくネパールの日本大使館・根本大使から外務省へ「この大要を日本協会にも知らせてほしい」と、次のような報告書が入り、外務省から連絡してきた。**

**日本バドミントン協会**
**会長殿**
**外務省情報文化局**
**文化事業部長**

◎国際親善バドミントン大会について

今般、在ネパール根本大使より別添公信写しの通り、過日行なわれたマヘンドラ国王記念国際親善バドミントン大会の件につきまして、報告がありましたので、ご参考までにご連絡いたします。

**外務大臣殿**
**在ネパール　根本大使**

◎国際親善バドミントン大会について

マヘンドラ国王記念国際親善バドミントン大会は、当初予定した日程より大幅に繰り延べられて、10月4日（木）より12日（金）までの9日間、カトマンズ市内のダサラク体育館（一九六七年、中国の援助により建設）において開催された。

# 親善の実、大いにあがる

## ネパール根本大使から外務省に報告

本大会は、通常の国際親善バドミントン大会に終始したのではなく、日本・中国・ネパール三カ国の友好親善の促進に、大いに貢献し、きわめて有意義であったので、関連記事添付の上次の通り報告申し上げる。

〔1〕ネパール・バドミントン協会は、当初ビルマ、中国、インド、パキスタン、タイ及び日本の合計六カ国に本大会への招請状を発出したところ、当初参加の旨回答越した国は中国のみであったため、大会の成立が危惧されたが、後にわが国の参加により、ようやく国際大会としての形をととのえることができ（ネパール側の喜びようは大変なものであった）更にネパール側が誠意をもって大会を運営実施し、また中国及び日本選手団が本大会を盛り上げるよう努力した結果、大成功裡に全日程を終了することができた。

〔2〕本大会開催期間中、各種の親善行事が行なわれたが、そのうち日本選手団に対する接遇ぶりを次の通り略記する。

★**10月1日**　日本選手団カトマンズ到着。ネパール・バドミントン協会会長等出迎え

★**10月2日**　ネパール・バドミントン協会、日本選手団をヒマラヤ展望に招待

★**10月4日**　開会式。バスンドラ殿下（国王の叔父君、ネパール・スポーツ委員会委員長）開会宣言（当方より本使、館員出席）

★**10月5日**　トーナメント開始（以後、連日午後6時より挙行）

★**10月8日**　バスンドラ殿下主催カクテル・パーティ（日本、中国、ネパールの各国選手出席）

★**10月9日**　曹中国大使主催日本側関係者に対するカクテルパーティ（於・中国大使館、日本選手団、本使及び館員出席）

★**10月10日**　本使主催カクテル・パーティ（於・公邸。ネパール・バドミントン協会役員、曹中国大使以下、館員四名。日本、中国、ネパールの各国選手出席）

★**10月11日**　バラル・ネパール警察庁長官主催カクテル・パーティ（於・総監室、日本選手及び館員出席）

★**10月12日**　閉会式（王妃殿下より賞品授与）曹中国大使主催レセプション（於・中国大使館。ネパール・スポーツ委員会、バドミントン協会役員、日本、中国、ネパールの各国選手出席）

★**10月13日**　日本選手団帰国

ネパール・バドミントン協会役員、中国、ネパール両国選手その他見送り。

なお、当夜ネパール側により打ち上げの晩さん会が行なわれ本使も出席した。

〔3〕10月4日、本大会の開会式に際しバスンドラ殿下（ネパール・スポーツ委員会委員長）は、本大会を「故マヘンドラ国王記念国際親善バドミントン大会」と称するむね、宣言し、また同12日、王妃陛下はじめ王族諸殿下ご臨席のもとに閉会式が挙行され、王妃殿下より大会の参加選手に賞品等を授与され、ネパール側の本大会に対する配慮ぶりを充分、うかがうことができた。

なお、中国側の本大会に対する力の入れ方は異常ともいうべきものがあり関係者全員が「スポーツ外交」に徹している感があった。

〔4〕ネパール側の参加選手全員が山本コーチ（日本青年隊海外協力隊員）によって育成されてきた選手であり、同隊員の本大会に果たした役割りは実に大きいといわなければならず、ネパール側も同コーチの努力を高く評価していた。

〔5〕以上のように、本大会は日本・中国・ネパールの三カ国二十五名の選手による国際バドミントン大会であったのみならず、日中、日ネ、中ネ間友好親善の促進に、大いに貢献し、きわめて有意義な大会であった。

ついては上記経緯を日本バドミントン協会へ連絡願いたい。

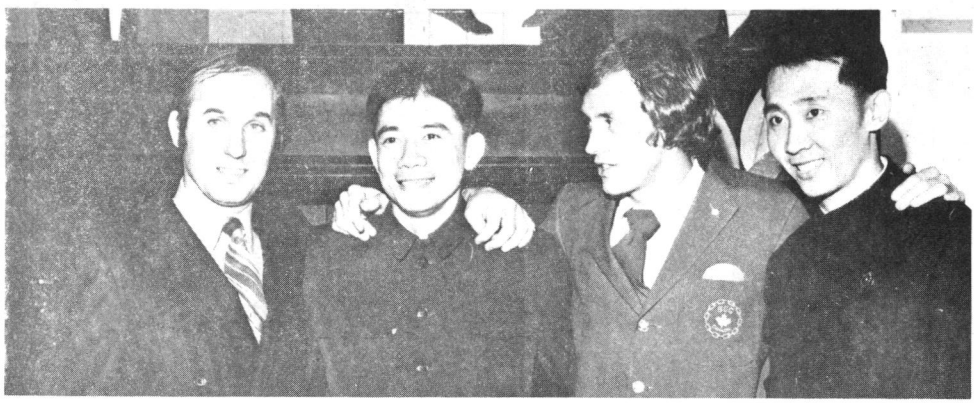
# 圧倒的、シングルスの強さ

## 中国選手団と初めて転戦して

手記　イーブ・パレ

**LE TOUR CHINOIS**
*par Yves Paré*

**THE CHINESE TOUR**
*by Yves Paré*



▶左から筆者パレ、湯仙虎、ジミーポールセン、侯加昌の各選手（モントリオール・メゾンヌーブ・サントルで）

*La Compagnie Rothmans de Pall Mall Canada Limitée a été l'hôte des*

*Rothmans of Pall Mall Canada Limited hosted a reception for players and*

一九七一年十一月、いまから丁度一年前になるが、中国のバドミントン・チーム一行がカナダを訪れ、各地を転戦した。このとき、一行と旅をともにしたカナダのトップ選手イーブ・パレが、その印象記を〝ロスマン・カナダ・オープン選手権〟のパンフレットに寄せている。

中国を知る資料がきわめて少い現在、文革後、自由圏で中国プレーヤーと接した人の手記は、日本の愛好者にとっても、貴重な間接経験といえるだろう。以下、要旨を紹介する。

×　×　×

**イーブ・パレ記**

昨年十一月、カナダに歴史的な出来ごとがおこった。史上初めて、一行四人からなる人民中国の代表団がバンクーバーに第一歩を印したのである。

そして、二人の選手、侯加昌（ホウ・チァ・チャン）湯仙虎（タン・シェン・フー）はマネジャー、通訳とともに西海岸から東海岸まで、カナダ全土を一カ月以上も転戦、これまでにない、すばらしいプレーとマナーを、人々の前に披露した。

### ○1ゲームは奪ったが

中国選手は、到着直後から、対戦したカナダ選手のほとんどを簡単になぎ倒し、我々がウワサに聞いていた強さが事実であったことを証明してみせた。

彼等のシングルス・プレーは完ぺきに近い出来ばえで、カナダ選手は一人を除いて、1ゲームすら奪えなかった。誰一の例外だったのは、私のダブルスのパートナー、ジャミー・ポールセン（注　23歳、一九七〇年の英連邦大会で、カナダ選手として初めてシングルスに金メダル獲得）だった。

彼は地元カルガリのグレンコウ・クラブでの試合で、ファンの声援を背に健闘したが、ゲームはとったものの、やはり黒星を喫したのである。

### ○初めてダブルスで勝つ

バンクーバー、ウィニペグ、エドモントンなど、西部地方での試合は、いつも超満員の観衆であふれた。ファンは、この中国の二選手が世界のトップ・プレーヤーであることを、よく知っていた。ただ中国がIBFに未加盟のため、その強さを〝公認〟されていないだけだ、ということも。

巡業は東部へ移り、最初の地トロントの試合で、中国組は初めてダブルスで負けた。フルゲームの接戦のすえ、栄冠に輝い

たのは、現ナショナル・チャンピオンのデーブ・チャロン、ジム・リンチ組だった。

オタワの大会（アルゴンクイン大体育館）には私がジミー・ポールセンと出場した。十四カ国の大使など、外交官諸顕が多数貴賓席をうずめた。これは大会が単なるスポーツの行事にとどまらないことを示していた。中国は時の話題であるというのみならず、中国の存在が、各国によって認められた、という政治の〝現実〟をも示していた。

ジミー・ポールセンがシングルスで敗れたあと、ジミーと私のペアは、フルゲームのすえ、ダブルスに辛勝した。18－17、12－15、15－14だった。九百人の観衆はおどり上って喜んだ。

## ○興奮のルツボと化す

一週間後、我々たモントリオールへ到着した。ここでは私は試合に出る選手というだけでなく、大会の組織当事者でもあった。観迎レセプションのあと、中国選手と私たちは市長を公式訪問し、モントリオールの〝ゴールド・ブック〟に記念の署名をした。

モントリオールでの大会もオタワでの筋書きと同じことになり、シングルスは中国がとった。我々はオタワでの喜びを失望に変えないために、ダブルスでがんばった。

この試合の経過も前と似たものになった。第1ゲーム18－17第2ゲーム11－15、そしてファイナルが15－10。勝利の瞬間、二千の観衆でうずめられた会場は興奮のルツボと化した。スタンドのムードは〝愛国的〟であった。

## ○アイスホッケーに驚く

その翌日、一行はモントリオール体協主催の晩さん会に正資として招かれ、大いにくつろいだ。だが、中国勢にとって最も楽しい出来ごとは、そのあとにやってきた。

私たちは一行を、我々の〝国技〟に招待した。彼等はアイスホッケーを生れて初めて見て、ただただ、目をまるくするばかりだった。スケートも、スティックも、リンクも彼等には初めての経験だった。

信じないかもしれないが、彼等は、宿舎にたどり着くまで、いま見たばかりのスポーツについて語りあきなかったのだ。

二日後、今度は我々が中国代表から夕食会に招待された。とびきり上等な中華料理に舌つづみを打つと同時に、我々は一そう、この新しい友人たちと親しくなった。

この一連の親善大会で、我々が学んだことがいくつかある。

## ○最良の国際親善

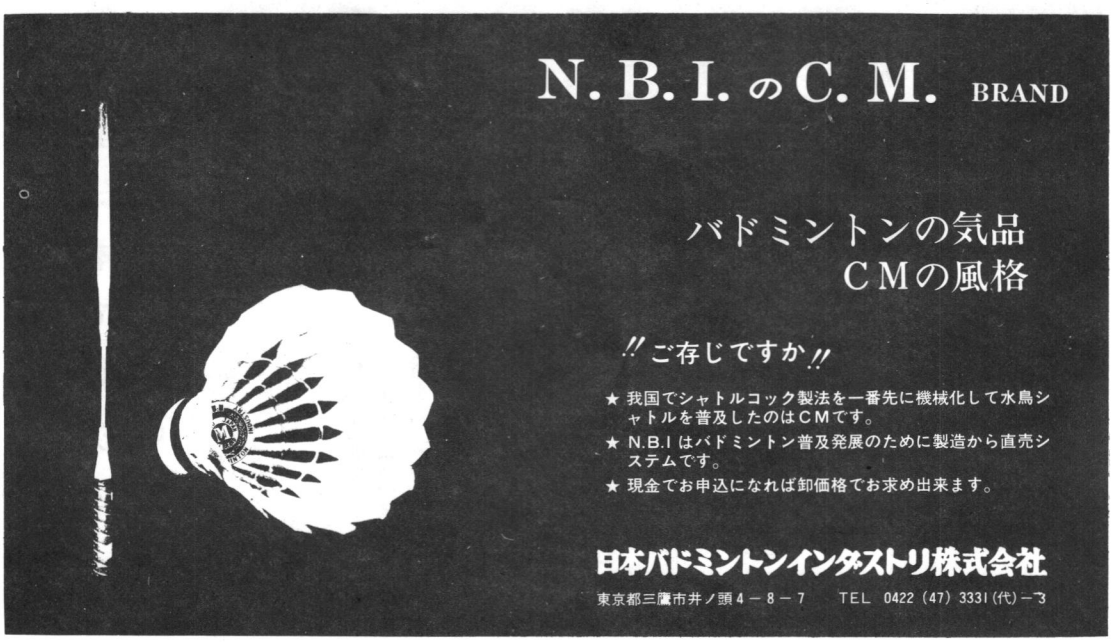
第一は、なんといってもスポーツは、国家間の親善と理解を深め、あるいは〝相違〟を融和する最善の手段である、ということだ。

第二、遠来の友は我々と全く違ったものの考え方に立つ人々であるにもかかわらず、すばらしく親切であったこと。

第三に、カナダのバドミントンは、この世界の強豪から（ダブルスで）3勝したことを誇っていいということだ。中国はさきにデンマークで二度、親善シリーズをやったが不敗だったのだ。

シリーズを通じて、これまでにない観客がつめかけ、カナダでバドミントンが大きく成長しつつあることが実証された。

（編集部注）中国にもアイスホッケーはあり、今年春（71年度になるが）の世界選手権Cグループに出場した。しかし、主としてさかんなのは東北地方（もとの満州）であり、南の地方の人なら、この競技を知らないのもふしぎではない。

**::::大会要項::::**

**【主催】**日本バドミントン協会、開催県バドミントン協会
**【後援】**読売新聞社、東京12チャンネル・テレビ
▽……日　程……△
**★第1戦**　1月28日（日）東京・代々木第二体育館
**★第2戦**　1月29日（月）横浜・横浜文化体育館
**★第3戦**　2月3日（土）岐阜市・東海女短大体育館
**★第4戦**　2月4日（日）宇都宮市・栃木県体育館
**★第5戦**　2月6日（火）東京代々木第二体育館
**【入場料と前売り】**東京大会は千円、五百円、三百円、宇都宮大会は八百円、五百円。岐阜大会八百円、五百円、二百円。
東京都内および開催市のプレイガイド、日本バドミントン協会と開催県バドミントン協会事務局で発売。
**【競技方法】**全日本×全ヨーロッパの対抗戦。2複3単の勝敗ポイントで勝負を決める。
**【使用シャトル】**47年度日本協会検定合格シャトルのうち一種を使用。
**【日本代表】**（予定）湯木博江（カワサキ）相沢マチ子、竹中悦子（ヨネヤマ）ほか若手数名を選抜、全日本の成績で。

## 青い目の美女六人がふたたび来日

# 第2回国際女子競技大会の開催決まる

## ギルクス夫人ら一線級勢揃い

### …全欧州×全日本で対抗…

### 1月末から東京などで五試合



第1回大会で来日したデンマーク女子チームは快活な選手ぞろいだった（羽田で）

ふたたび青い目の美女たちが日本へやってくる――日本協会は一月下旬、第二回国際女子バドミントン競技大会を、東京など数都市で開催することになりその日程、招待選手など、開催要項を式記のように決めた。上招待選手は、一部、変更があるかもしれないが、さる69年の第五回ユーバー杯世界選手権大会のおり、スタンドをわかせたイギリスの人気スター、ギリアン・ギルクス夫人はじめ、五カ国で六人。いずれも現代のヨーロッパを代表するトップ級ぞろい。うちツェドベリ夫人（スウェーデン）バンビューセコム（オランダ）ワクロウ夫人（西ドイツ）は初めての来日。この三カ国からの女子プレーヤー来日も初めてである。

一行は一月二十五日ごろ来日し、二十八日の東京大会を皮切りに、二月六日まで五戦を行ない、七日に帰国の予定。全カードとも「全欧州×全日本対抗」という形で展開され、1対抗は2複3単の5試合になる予定。

▽…来日予定の選手…△

【デンマーク】ペルニール・カガード夫人＝25歳、デザイナー学校出、建築家。デンマーク選手権64年シングルス、72年ダブルス優勝。全英選手権70年混合優勝。72年ユ杯代表、来日二度目。

アン・フリント＝29歳、16センチ、弁護士。デンマーク選手権68年、72年ダブルス優勝カガード夫人のパートナー、72年ユ杯代表。来日二度目。

★

【スウェーデン】エバ・ツェドベリ夫人＝29歳、欧州一のベテラン。16歳で国際舞台にデビュー以来、代表40回余。全英選手権68年、71年シングルス優勝ミュンヘン五輪代表。72年デンマーク・オープンで相沢、湯木中山を連破して優勝。

★

【オランダ】ヨーケ・バンビューセコム＝19歳、オランダ選手権者、国際代表22回、ミュンヘン五輪代表、72年スウェーデン国際、オランダ国際選手権シングルス・ベスト4、同全英選手権準々決勝で湯木に惜敗。

★

【西ドイツ】マリルイーズ・ジズマン・ワクロウ夫人＝25歳国際代表30回、ダブルスと混合ダブルスで西独選手権9度。欧州選手権68年、70年、72年いずれもシングルス準優勝、ミュンヘン五輪代表。

★

【英国】ギリアン・ギルクス夫人＝22歳。16歳で国際舞台にデビュー。全英選手権69年混合ダブルス、欧州選手権72年ダブルス、混合ダブルス各優勝。72年全英選手権ダブルスでは準決勝で相沢・竹中組に敗れる。ミュンヘン五輪混合ダブルス優勝、69年、72年ユ杯代表、来日二度目。

## スタンドの目

### ビッグ・ゲーム

**バドミントン・女子国際競技会**
**日本―デンマーク**

6月に東京で開かれるユーバー杯世界選手権の前哨戦。日本は過去二回優勝しており今度のユ杯インターゾーンでは、まず欧州代表とあたる。その欧州実力NO・1がデンマーク。同国からは昨年、もと個人の世界チャンピオン湯木（河崎ラケット）を破ったベルクントら四人の金髪美女が来日、ダブルスの世界一、湯木・中山（旧姓高木）らと対戦する。〔28日・大阪中央体育館、30日・東京代々木第二、2月2日・横浜公園体育館〕

第1回大会について紹介している記事（週刊文春「スタンドの目」から）は多数あり，おかげで一般の関心が高まった。

# 普及、強化に大きなプラス

## 〝輸出超過〟をなくそう

今度の大会は、第一回国際女子の企画が立てられたころから考えられていた。

日本のバドミントン競技は世界有数のレベルにあり、いわゆる国際交流も盛んだが、そのほとんどは、海外への遠征。事実トップ級の選手たちは例年、十試合近くの大会に出かけていっている。

しかし、外国選手の来日はほとんどなく、いわば一方的〝輸出超過〟の状態が続いてきた。

日本チームのメンバーは十二月の全日本総合選手権大会の結果を待って選考されるが、ユ杯代表のうち湯木（カワサキ）相沢、竹中（ヨネヤマ）の主力三人は確実。このほかに次代のホープとして、数人の若手が選ばれることになるだろう。

（注）ユ杯代表のうち中山紀子（弘文堂）はおめでた、高坂薫（佐渡汽船）は第一線から引退しており、柴山きよこ（三菱電機）は故障中でいずれも出場は無理な状態。

競技人口も多く、レベルも高い日本のスポーツ界の中では、これはきわめて珍しいというか、ふしぎな現象である。

この数年をふりかえってみても、64年、70年、それに72年のト杯、69年、72年のユ杯を除くと、外人勢の来日は69年のインドネシア女子、71年のコプス（デンマーク）来日、それに第一回女子国際（デンマーク女子）以外は、全日本への例外的な参加がある程度だった。

どうして、こんな片輪な状態になっていたか。一番大きい理由は日本協会が財政的、組織的に弱く、多額の経費を必要とする競技会を運営できる自信がないことだった。

しかし、こんなことではいけない、という強い反省が69年ユ杯（東京、日本2連勝を飾る）後から起こってきた。

日本で国際試合をやる利点はなにか。まず、日本選手の強化

につながる。海外遠征の場合は限られた選手しか行けないが、国内で行なえば、より多くの選手が外人と対戦できる。第二に試合に出場できなかった次代のホープたちが、実際にゲームを見て勉強し、刺激を受ける。

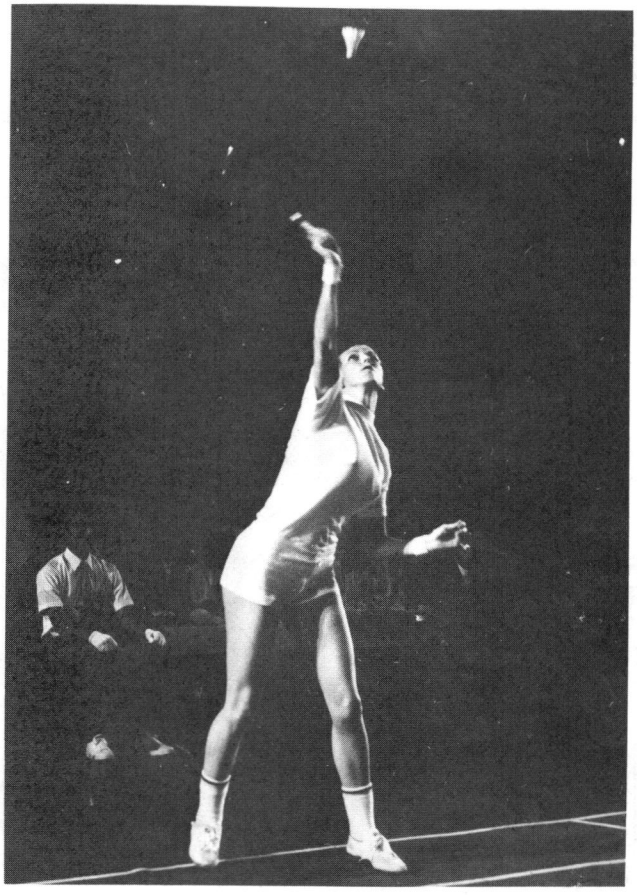
さらに、一般愛好者が、見て楽しむのはもちろん、やはり刺激を受ける。間接的には、この大会をマスコミが取材することによって、バドミントン競技が一般の人々や他のスポーツ関係者にアピールされ、それだけ認識と理解が深まる。

また、企画・運営のいかんによっては協会に財源をもたらしこれがまた全国の普及活動や選手強化のために還元されることになる。

さいわい、ユ杯の勝利によって、新聞、テレビ関係の注目度が高まってきたところから、日本協会とこれらマスコミ筋の人人との間で何度か話し合いが持たれた結果、72年一月末からの第一回国際女子大会が実現し、デンマークの美女たちのプレーは、日本がユ杯3連勝めざす前宣伝として、大いに役立った。

この間、関係者の間では、国際競技会を常設的、継続的な形に持っていくことが検討され、日本協会としては、近い将来さらに国際競技会を一年に二回程度は行なっていきたい、との意向を明らかにした。

アイデアとしても、さまざまな形のものが出された。一番有力なのは、この大会を毎年の国際シリーズの第一戦もしくは締めくくりとする案だった。



第6回ユーバー杯のとき、シースルー・ルックで評判となったカガード夫人。

## 将来は国際サーキットやワールドカップの開催も

国際的にみて、バドミントンの競技シーズンは毎年十月から三月あたりの半年（東南アジア等を除く）に限られており、大きなトーナメントは二月末のデンマーク・オープンから全英、全米、全カナダと続く。

そこで、このシリーズの前か後に日本で国際大会を開き、全部をひっくるめて〝世界サーキットにしよう、というもの。ゴルフが今春マニラを振り出しに日本まで、8戦にわたるアジアサーキットを、アルペン・スキーが欧州と米国をマタにかけたワールド・カップをやっているが、このような形の試合がやれたら楽しいではないか。

もちろん、これには世界各国と、その一線級プレーヤーの協力がなければ無理。日本協会の準備も大がかりになるし、経費をどうするかも難しい問題だ。

ということで、現時点ではタナ上げになったか、このアイデアを今後に生かす、という考え方は、受け継がれていくはずである。サーキットができない場合でも、日本の（もちろん協会の、という意味だが）財力と運営力の問題さえメドがつけば、単独に〝ワールド・カップ〟を開いてもよい。

バドミントン競技には個人の世界選手権がなく、全英がこれに代わるものとして考えられている。ただ、いずれの場合にも女子種目だけ、ということではなく、男女をひっくるめてやらなければならない。

こういってはミもフタもなくなるが、日本の実力は女子が上ということになっている。だから、マスコミや一般ファンも、まだまだ男子のプレーに対する理解度は低い。

そこで、いわゆる〝絵になる〟女子をまず売り出し、支持者を広めておいて、男子を割り込ませ、ほんとうにスピードとスリルに富んだ男子の試合にも熱烈なファンをひきつける、という手段をとることも、このさい、やむを得ない。

このように、今度の国際女子大会は、日本のバドミントンが国内的にも、国際的にも、大きく飛躍するための〝出発点〟だということを理解したい。

成功を祈る。

# カアルトン ニュートーナメント は水鳥？

ナイロンを感じさせないナイロン。

新開発された、カアルトン〝ニュートーナメント〟シャトルは、ナイロンと云うよりも英国製高級水鳥シャトルに最も類似した性能を備えた、新しいシャトルです。





**ニュートーナメントの特徴**

●打球音が変った●ラケットから離れる感じが変った●ネットでのターンノーバ（回転）が変った●スピン●シャトルに対する視覚度（よく見える）がよくなった●飛翔のときの一貫した安定性が増加された。

**メトロレジャー株式会社**

東京都千代田区外神田5-6-4 TEL. 833-3661（代）

# 新春早々にも合意か

## ＝ようやく訪れた新しい歴史の一ページ＝




バドミントンの日中交流が、ようやく実現の見通しとなった。10月に日本バドミントン協会幹部と中国代表（訪日中のバレーボール代表団）が会談した結果、中国側が日本の考え方や希望を、帰国の上、関係者に伝え、実現するよう努力すると、の回答を得たもの。日本協会としては、九分九厘、交流が実現するのは間違いないと見ている。

中国では年末が次年度の年間総合スケジュール決定の時期に当っており、中国からの返事は早ければ新年早々になるものと予想されている。実現した場合日本としては、まず中国側からの訪日を希望している。

日本協会は71年夏から日中交流問題に取り組んでおり、一年三カ月ぶりに、ようやくメドがついた。現在、日本スポーツ界で正式に中国と交流しているのは卓球、バレーの二つ。新年早早、アイスホッケーが訪中することになっているほか、サッカーとバスケットが、熱心に交流実現を促進している。このほか変りダネとして、来春四月には大相撲が北京で巡業する。

競技の種類によっては、国際ルールがカベとなって、交流が困難だが、バドミントンではその点の障害はない。

日本協会が日中問題を正式に取り上げたのは71年7月の全国理事会・総会の席上。このとき交流を研究するための小委員会を設けることが提案され、菊地常務理事を長とする「日中交流部会」が発足した。

この委員会は結局、交流の早期実現を期すべきである、との見解をまとめ、常務理事会に答申した。常務理事会はこれを了承、72年1月の全国理事会もこれを認めたが、理事会に引き続き行なわれた総会で、本田会長から「再検討するよう」指示があり、いわば〝差し戻し〟となった。

問題の処理は、常務理事会に一任されたが、ユーバー杯、ミュンヘン五輪、その他、競技会等の行事が重なるなどして、論議をつくす時間がないまま、日が流れた。

ところが、10月2日、田中内閣の出現によって、日中復交なった直後、中国からナショナル・チームとしてのバレーボール代表団が来日した。

この一行は、単にバレーの試合だけでなく、ほかにも任務をたずさえて来たと思われ、日中交流の窓口である日中文化交流協会の呼びかけで、10月5日、日本協会の川端理事長、菊地常

# 日中交流実現へ

## ＝日本協会が正式に文書で申し入れ＝

務理事が、周正副団長（中華全国体育総会・国際部責任者）と会見した。

席上、日本側の考え方について説明、中国側の態度もほぼ理解できたが、これに基づき日本協会は、常務理事等の間で（卜杯開催中だった）見解を統一した結果、交流に踏み切ることで意見がまとまった。本田会長にも報告され、了承を得た。

そこで、10月16日、文化交流協会代表との間で問題を煮つめ、中国に文書で交流意志表示の申し入れをすることが決まった。ついで18日、常務理事会を開き、申し入れすることを決定。

20日、中国バレー団の宿舎・ホテル・ニューオータニに川端理事長、菊地、牧野両常務理事、後藤理事、村山事務局長の一行が訪問、文書を手渡した。中国側は徐振宇団長（中華全国体育総会副秘書長）周正副団長が出席した。

席上、日本協会は「中国のバドミントン界を代表するのは中華人民共和国のバドミントン協会である」むねの見解を伝え、この趣旨に沿って、日中交流を実現したい」と述べて、文書を手渡した。

また、日本としては①新春にも試合を実現したい②中国代表チームの訪日を第一番に歓迎したい。訪中はその後に行ないたい――との考え方をつけ加えて申し入れた。

中国側は「われわれは全権を持っていないので、この話をすべて帰国して責任者に伝える。年末にかけてが、スケジュールるのではないか」との言葉を聞くことができた。

〝ピンポン外交〟にピリオドが打たれた現在、バドミントン時代の到来――ということもできる。

中、高校生の課外活動はいうまでもなく、北京市内の細い路地で小さな子供達がラケットを打ち興じる姿が、かい間みられたし、人民公社では農村婦人達が、休憩時間を利用してバドミントンに親しんでいるなど、あらゆる階層に普及しているのが特色。

街の雑貨店（スポーツ用品店ではない）でも、最近は卓球用品と並んでバドミントンのハネが置かれていたのが目についた。

また、記者は後藤協会理事から依頼を受けて、バドミントンの協会報10数冊を中華全国体育総会の宋中秘書長に手渡したところ、心よく受け取ってくれるとともに、日本のバドミントン界に強い関心を示していた。

「チャンピオン国のインドネシアに勝ったことがある」（中華全国体育総会秘書処責任者の呉重遠さん）とはいえ、実力的にはまだ発展途上の段階にある中国バドミントン界。

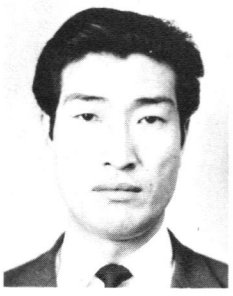
レベル・アップのために日中交流の推進を中国側は強くのぞんでいることを滞在期間中に痛切に感じた。

作製の時期なので、具体的なことはいまいえないが、いずれにしろ、交流実現には努力するし日本側の誠意は高く評価している」と答えた。

実際問題としては、交流のためには、交流協定作製、調印の必要があり、その終了後、交流試合の段取りになる。スポーツ交流の窓口である日中文化交流協会の村岡事務局次長が年末に卓球チームとともに訪中するので、このさいに、具体的な点がはっきりすると見られる。

## 中国スポーツ界とバドミントン

東京新聞
海藤栄治



去る九月、第一回アジア卓球選手権大会（北京）に参加した日本選手団に随行して、中国スポーツ界の現状に接することができた。

文革後の新中国のスポーツ界は「体育活動を発展させて、人民の体位を向上させよう」という毛主席の体育路線に添って、めざましい進展をみせている。

それが〝大衆性〟に基盤を置いていることから、バドミントン競技は、その手軽さもあり、いまや、卓球に代わって中国人民の間で深く親しまれている。今夏、初めて全国的規模で開かれた五種球技大会の種目にも加えられたほど。

中華全国体育総会関係者の口からも「最近はバドミントンがものすごく普及してきている。近い将来、卓球人口より多くなるのではないか」との言葉を聞くことができた。

### いまや卓球しのぐ勢い

### 雑貨商店頭にもある用具

# 体育総会加盟は22競技団体

## 中国スポーツ界の組織と活動　全面的な国家援助

中国のスポーツ界には、もちろん、プロといったものはなくいわゆるアマ・スポーツだけ。統括団体として、日本の日本体育協会に当たる「中華全国体育総会」がある。

総会は政府機関の一つである「全国運動委員会」と密接な関係を保ちながら、活動を推進している。この委員会は、さしずめ〝スポーツ省〟と考えていいだろう。

体育総会は秘書処（事務局）が日常の行政事務を担当し、活動組織としては国際部と競技部の二つに大別される。普及強化と国際交流の推進、というわけである。

そのほかの組織・機関も日本の体育協会とよく似ている。

総会の支部が各省、市、自治区にあり、各運動協会（競技団体）が、それぞれの支部に加盟している。もちろん、全国を総括する運動協会も総会の加盟団体で、その数二十二。

別表の通りだが、その中では囲碁、将棋（中国式）航海運動航空（パラシュート）無線電機などは、日本では〝スポーツ〟の範囲にはいらない変わりダネといえる。

各運動協会は独自の活動を行なっているが、総会の会員としての加盟費はゼロ。各協会には国家の援助があり、いつも資金がなくてピーピーしている日本の各競技団体とは雲泥の差だ。

活動状況は文革前と後ではかなりの違いがあり、文革後は、大衆化が第一目標。このため重量挙げ、ボクシングなどはカゲをひそめた。野球（棒球という）は、見たこともあるという人もいるが、まず皆無と考えていいだろう。

しかし、運動の現象がどうあれ、基本的なものは、いまから二十年前に毛沢東主席がかかげた「体育活動を発展させて、人民の体位を向上させよう」という呼びかけ。つまり、スポーツは一つのはっきりした〝国家理念〟に基いて進められている。

海外交流も思いのほか盛んで、71年度、すでに外国から74チームを迎え入れ、42チームを海外へ送り出している。

日本との交流は卓球、バレーそして近々にアイスホッケーと三つ。非公式のものとして、サッカー、水泳（訪中）の民間交流があるが、中国は他の国とバスケット、体操、バドミントン、スケートでも交流している。

バドミントンは文革後、北欧、カナダ、英国、インドネシア、マレーシア、ネパールなどと。つい最近、ト杯で日本を破ったマレーシア（タン・アイク・モンなどの代表）に完勝するという強さを発揮した。

中国語でバドミントンは羽毛球。競技人口は三十万人ともいわれる。協会の責任者は王義州氏。シャトルの羽根（水鳥）の世界的な原産地としても有名で復交により、いいシャトルが入ることを期待する声もある。

**▽体育総会加盟の運動協会**

水上、陸上、冬季運動、自転車、卓球、バスケット、バレー、サッカー、テニス、バドミントン、体操、登山、武術、囲碁、将棋、レスリング（中国式、国際式が別個に）弓道、射撃、航海運動、航空、無線電機

**▽体育総会幹部**　朱仄、于歩血（責任者）李青川、趙正洪、李夢華、荘則棟、宋中（秘書長）


水鳥　検定合格球
ファストゴールド
ファストシルバー




ファスト印シャトル
コック　製造発売元
有限会社　ジャワ商会
山形市六日町７の28
電話　0263（22）3994(代表)

# 中国の代表は「北京」

## 日本体協、ＪＯＣが正式見解表明

中国スポーツ界を代表するのは北京――日本体育協会が、このような見解をまとめたことでいわゆるアマ・スポーツ界の中国問題に対する見解も、ようやく〝統一〟されることになった。

これまで、日本体協やＪＯＣ（日本オリンピック委員会）など、日本のアマ・スポーツ界を統括、リードする組織は、中国問題については、みずから積極的に深入りすることはせず、当らず、さわらずの態度をとり続けていた。しかし、日中復交も正式になり、ようやく大勢のおもむくところ、明確な態度を打ち出したわけである。

もともと、日本体協に加盟する各競技団体の中には、中国と交流を希望するところが多かった。これに対し、体協側は「国際連盟と話し合い、問題がなければ、自主的に活動してよい」との態度を示していた。

しかし、競技団体側は「組織内で、中国問題に対する認識も薄いし、万一、自分達の方針が体協の考え方とちがってはまずいから」と「親が手本を示してくれなければ、子供は困る」式で、体協が方針を打ち出すよう望んでいた。

この間、ＪＯＣの中にある国際問題委員会は、いち早く、72年5月、この問題をとり上げて「中国スポーツ界を代表するものは、中華人民共和国の中華全国体育総会である」との考え方をまとめた。

これは11月ＪＯＣの常任委員会、総会で承認された。

主な内容は①中国は一つであり、中国スポーツ界を代表するものは中華全国体育総会②このため、台湾がＩＦ（国際競技連盟）やＩＯＣから除名されることがあっても、やむを得ない③ＩＯＣやＩＦは中国の加盟（復帰）に積極的になることが望ましく、各競技団体も、そのために努力すること④一方、中国もみずから国際舞台にはいる姿勢、努力をしてほしい――というもの。

一方、日本体協専務理事でＪＯＣ委員長の青木半治氏は10月に来日した中国バレーボール代表団の徐振宇団長らと会って意見を交換した。その後、ＪＯＣの態度決定に関連して、日本体協も理事会で「中華全国体育総会を中国における誰一の統括団体と認める」との見解をまとめた。

これにより、日中スポーツ交流には、いっそうの拍車がかけられる見通しが濃くなった。

## 難問は国際連盟の規定

### 〝非加盟国との交流禁止〟違反すれば処分

日本スポーツ界の中国に対する考え方は、一応固まった。しかし、だからといって、日中交流の行く手は容易ではない。それはＩＦ（国際競技連盟＝バドミントンではＩＢＦつまり国際バドミントン連盟）の規定があるからだ。

この規定、簡単にいえば、ＩＦに加盟していない国と試合などの交流をやることを禁止しているもの。

もちろん、すべてのＩＦルールがそうなっているわけではないが、この規定のある競技団体では、違反すると、処分（除名など）される。

どうして、これが問題かというと、次ページの一覧表のように、中国が加盟しているＩＦは現在、バレー、アーチェリー、スケート、アイスホッケー、卓球の五つ（うち、バレーは中国が〝脱退した〟といっているのに、ＩＦでは〝まだ脱退していない〟といっている）ほかの競技には入っていないからだ。

つまり、中国が加盟していない競技の場合、日本が中国と交流すれば「ルール違反だ」と処分されるかもしれない。かといって、中国に「ＩＦに加盟しなさい」とすすめても「台湾が加盟している競技団体には、入りたくない」のが中国の態度だから、実現性はうすい。日本としては、当面、交流したくても出来ないという場合が出てくる。

こんなひっかかりのあるＩＦは次の14団体だ。

陸上、水泳、サッカー、ホッケー、ボクシング、バレー、体操、スケート、アイスホッケー、レスリング、重量挙げ、自転車、フェンシング、ハンドボール。

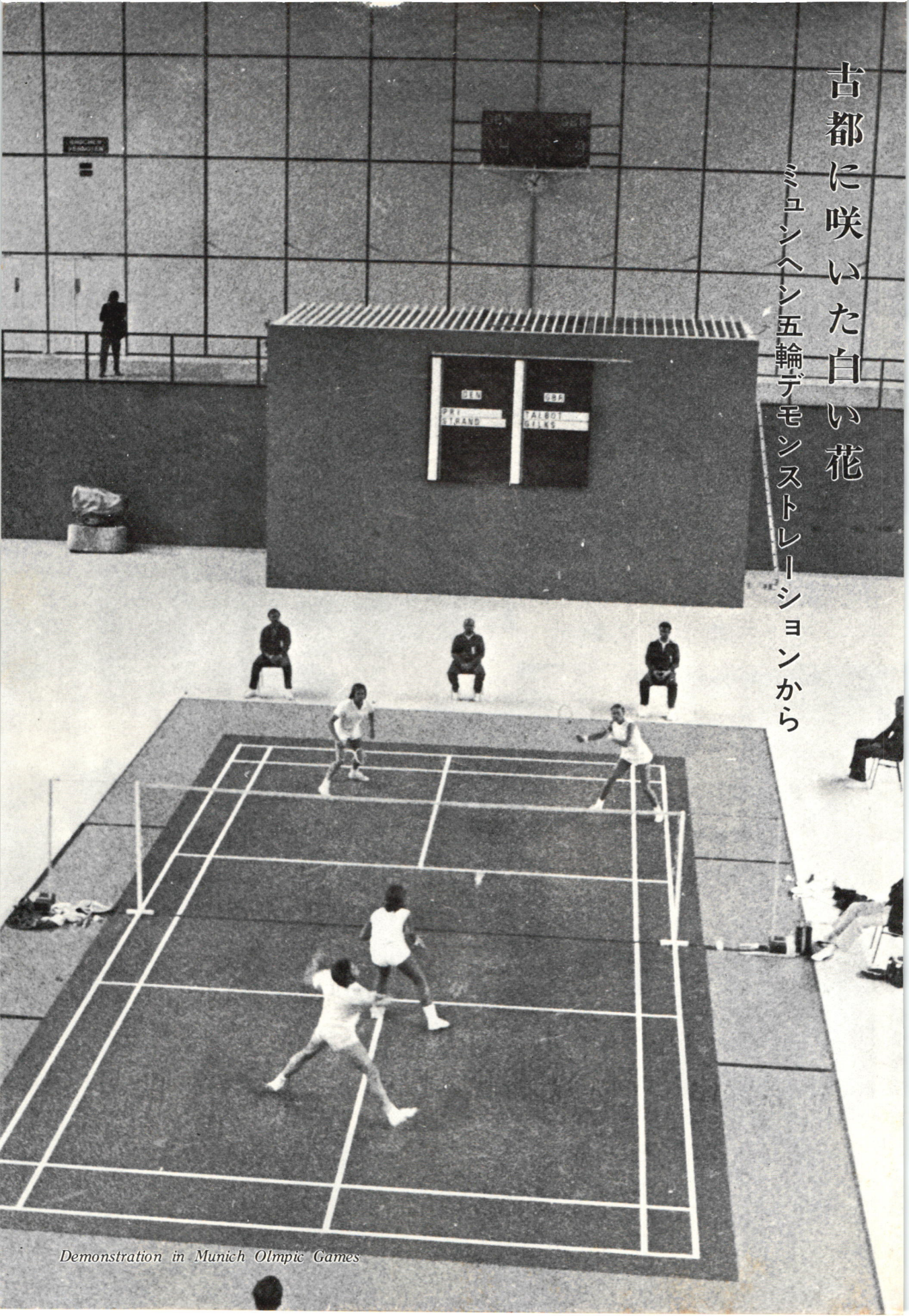
この中でもバレーはすでにＩＦから了承をとり、サッカーは例外（許可があれば）規定にあてはめてくれるよう運動するなど、いくつかの競技団体では、近い将来、ＯＫになりそうだが陸上、水泳などはやかましい。ＩＦルールを変えるよう、日本が努力しなければならない。

# 中国および台湾のＩＦ加盟状況一覧

S47. 12現

| ＩＦ | 中国 | | 台湾 | |
|---|---|---|---|---|
| | 加盟名称 | 加盟年月 | 加盟名称 | 加盟年月 |
| 陸上 | | | Republic of China | |
| 水泳 | | | Republic of China | 1956 |
| 蹴球 | | | China | 1954 |
| ホッケー | | | Taiwan | 1972 |
| ボクシング | | | Republic of China | |
| バレーボール | China Populaire | 1953 | Republic of China | 1970 9 |
| 体操 | | | Republic of China | 1964 |
| バスケットボール | | | Republic of China | |
| レスリング | | | Republic of China | |
| ヨット | | | China Republic | 1966 |
| ウエイトリフティング | | | Republic of China | |
| ハンドボール | | | Republic of China | 1972 8 |
| 自転車 | | | Association Cycliste National | |
| 柔道 | | | Republic of China | |
| ライフル射撃 | | | Republic of China | |
| アーチェリー | People's Republic of China | 1967 | Republic of China | 1969 |
| スケート | People's Republic of China. | | | |
| アイスホッケー | People's Republic of China | | | |
| 近代五種 | | | Republic of China | 1972 9 |
| 庭球 | | | Taiwan | 1971 |
| ゴルフ | | | Republic of China | |
| 卓球 | People's Republic of China | 1953以前 | | |
| ソフトホール | | | Republic of China | 1963頃 |
| バドミントン | | | Republic of China | 1957 9 |
| 剣道 | | | Republic of China | 1970 4 |
| 空手 | | | Republic of China | 1970 10 |

※スキー，漕艇，馬術，フェンシング，ラグビー，カヌー，リュージュ，ボブスレーには両国とも未加盟
※バレーについて中国側としては台湾加盟時に脱退したと称するも，ＩＦ側は加盟しており，正式に脱退していないと称する。



# 古都に咲いた白い花

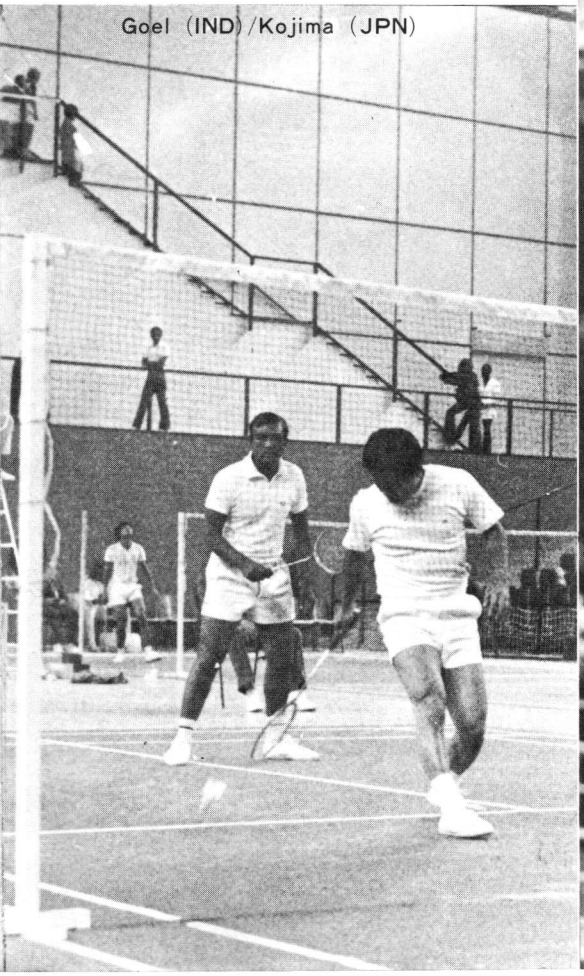
## ミュンヘン五輪デモンストレーションから

*Demonstration in Munich Olmpic Games*





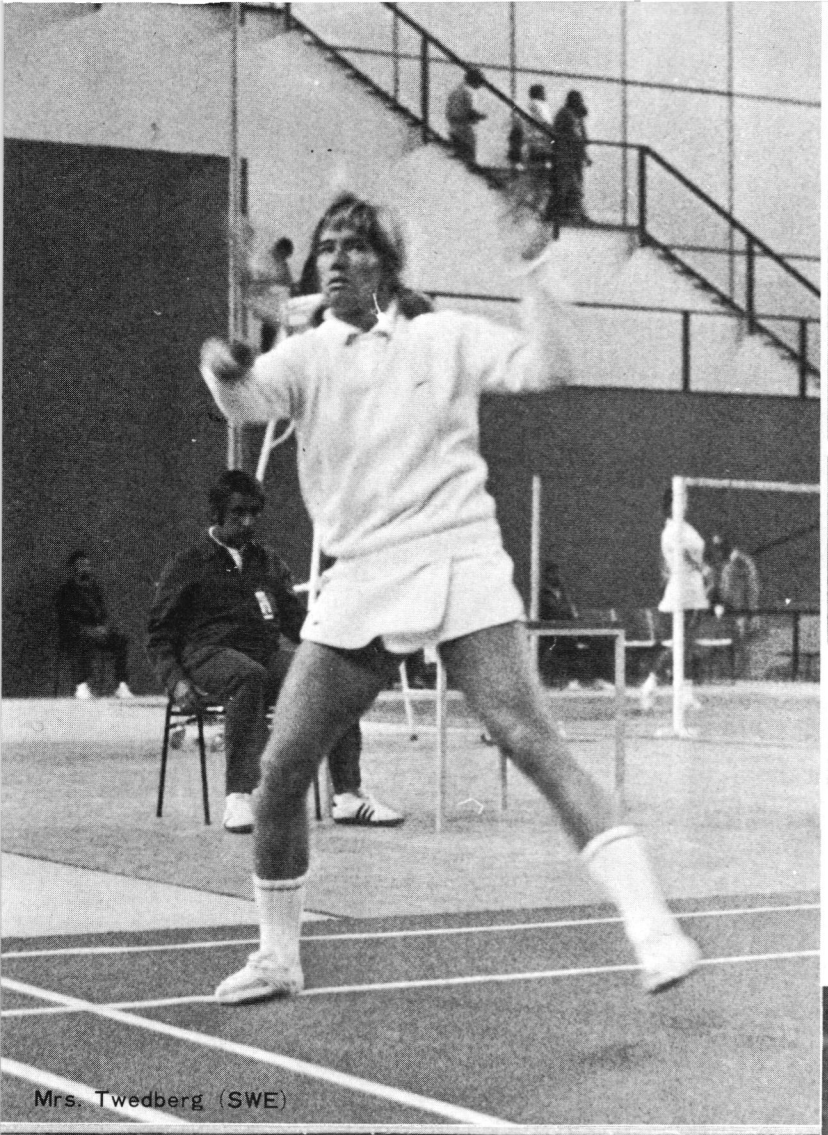

## —— 史上初舞台での熱戦







*Who is she? Guess her identity!*



Mrs. Twedberg (SWE)

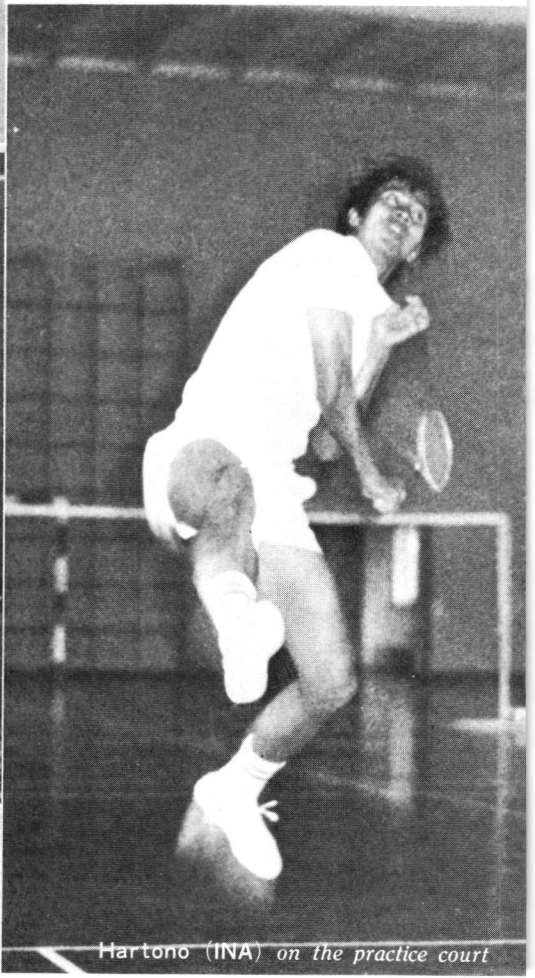


Miss Utami (INA) & Mrs. Nakayama (JPN

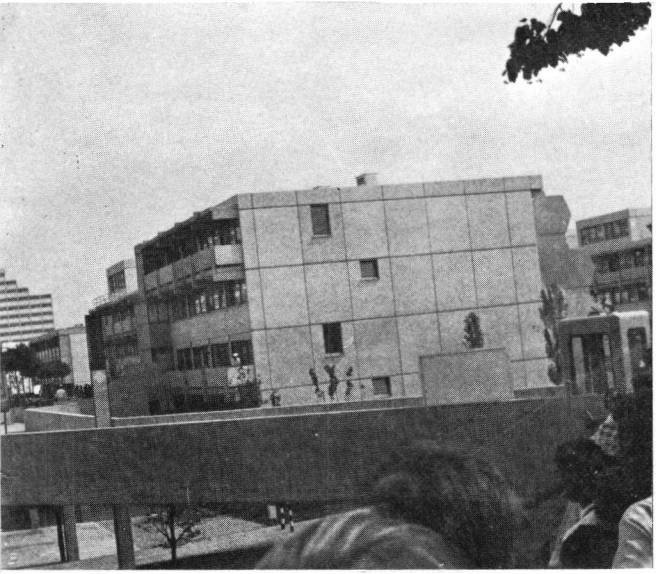
# コートの中で



Talbot/Mrs. Gilks (G.B)



Hartono (INA) *on the practice court*



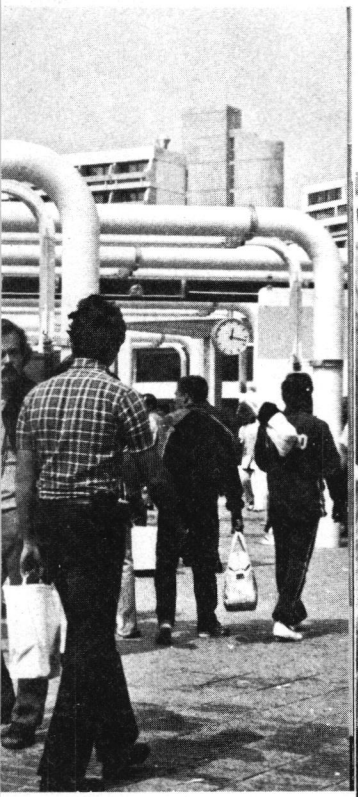


応援に来たご主人と仲よくやってるウ↑




→少しはスマートに見えまーす。ドイツの象徴、ワシの彫刻の前で

練習を終わると，することがなくなる（前号参照）↓ので，ロビーでテレビを見るしかない



プについていくと宿舎へ行ける。



行ってきます。さっそうとバスで
練習会場へ



→ゲリラ事件発生。いまこの建物に立てこもっている。



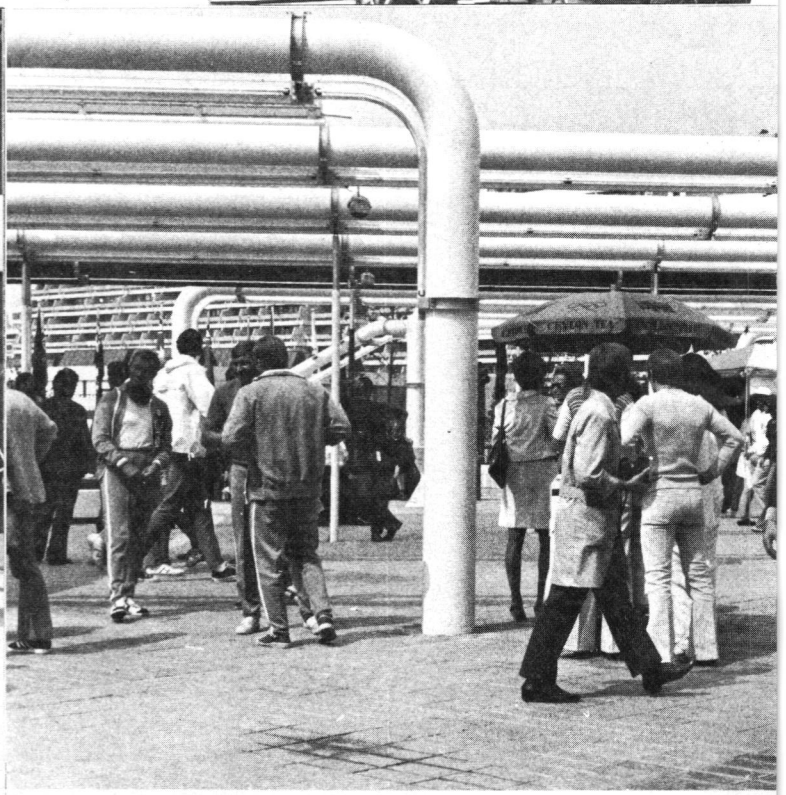
監督は悲しからずや,
↓独り本場のビールを飲む



# 選手村での生活さまざま

試合場のバレーボール・ホール前で



↑どういわけか村にはやたらとパイプの列がはりめぐらされている。黄色ノ





# ュンヘン

オリンピック史上、初めてバドミントン競技を登場させたミュンヘン大会――その概要はすでに本誌が前号で報じたとおりで、わが日本選手団は、いろいろと苦労したらしい。

しかし、実際のところ、やはり〝行ってよかった〟というのが、川端団長以下、参加選手団の本当の感想ではなかったか。

小島、中山夫人、湯木、いずれも海外遠征の数は正確に思い出せないほどのキャリアの持ち主。しかし、夏から秋にかけてのヨーロッパというのは初めての経験だろう。

それも、オリンピックという華やかな舞台をのぞくことができたのだから、幸せである。ミュンヘンは、オリンピックで一躍、有名になったが、もともとドイツ有数の古都で、どこへ行っても青空と緑と水と、そして花の匂いにあふれ、寺院、学校などの旧跡が多く、芸術の町でもある。

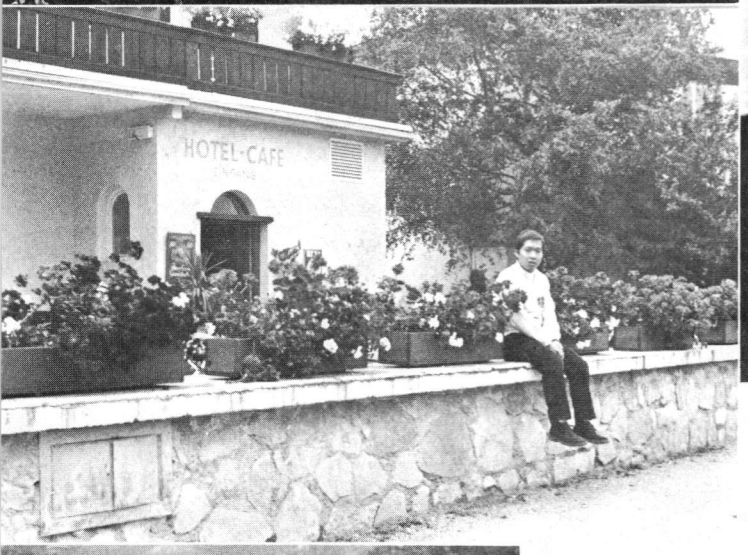
金持ちにはなったが、公害を引いたら何も残らないような日本を、つかの間でも脱出できたこと自体が幸せだったと思う。



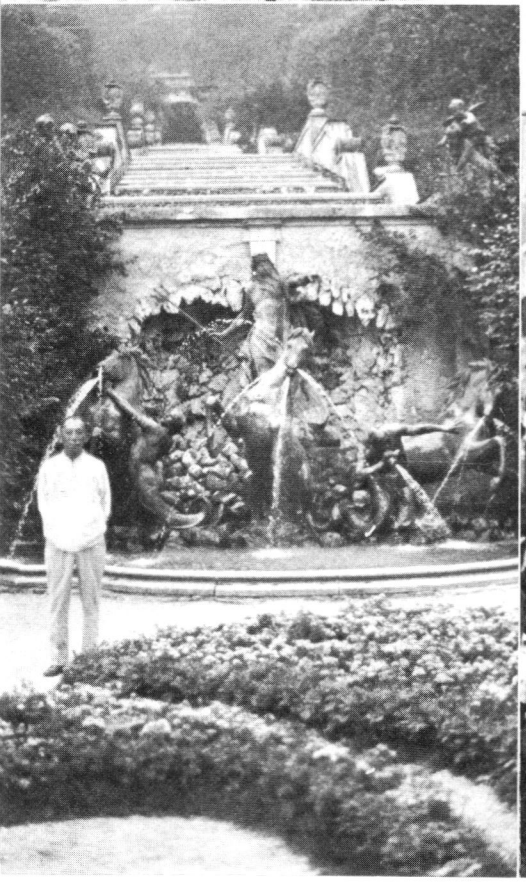






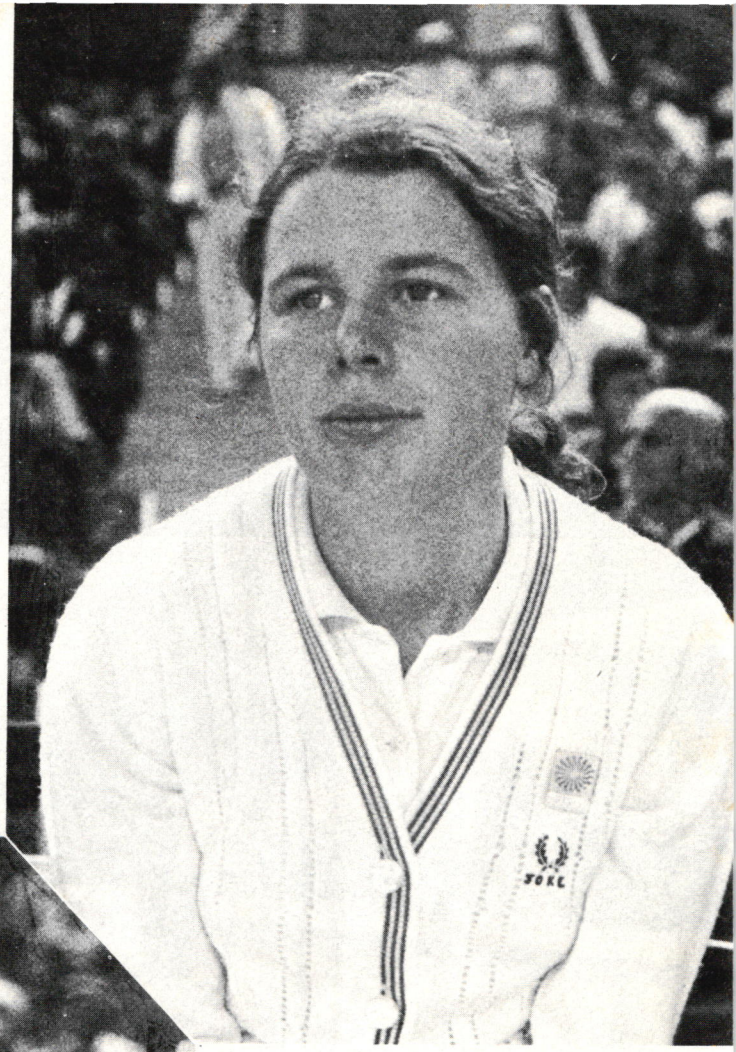



# 青空と緑の街ミ











# 初来日を予定されている欧州のスターたち

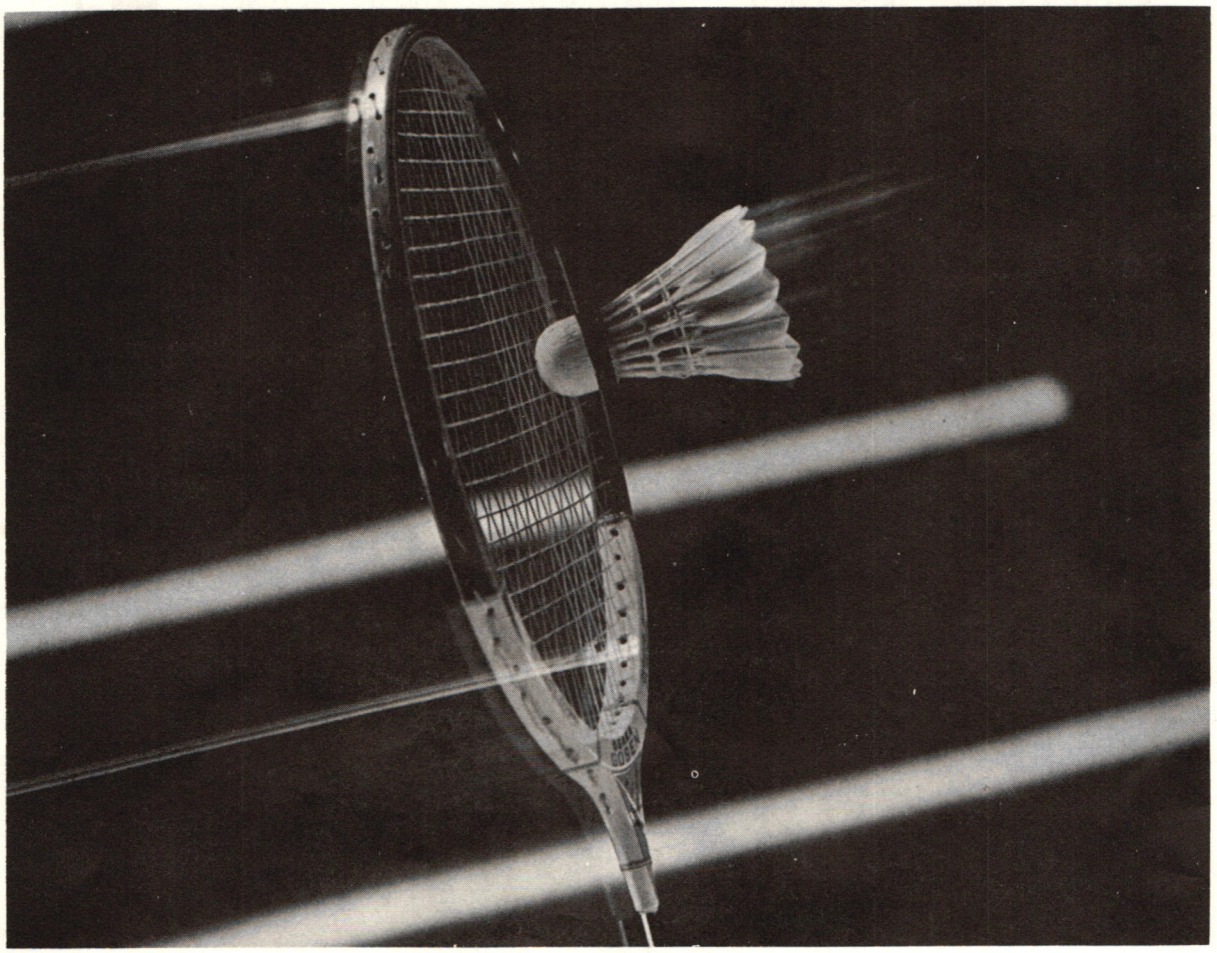
日本協会の川端理事長が、わざわざ役員としてミュンヘンまで行った仕事の一つに、来年一月末に予定されている国際女子競技会の参加選手折衝がある。

今年初めのデンマーク招待の成功をもとに、バドミントン熱を盛り上げようと考え出されたのが、選抜欧州女子の招待。全部で六人のうち、ここに紹介するのは、実現すれば来日は初めてという欧州のスター（撮影・川端理事長）だ。

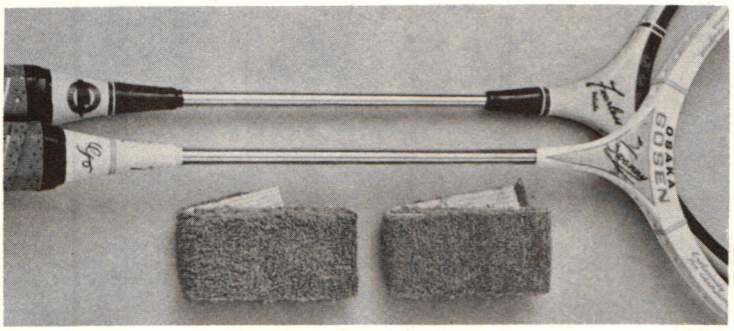
上はヨーケ・バンビューセコム（オランダ）20才、168センチ。その左、マリルイーズ・ジズマン＝ワクロウ夫人（西独）25才、169センチ。左は欧州NO1のツェドベリ夫人（スウエーデン）30才、163センチ。

《新発売》

# Swannv



## この確かなバイブレーション。
## それはスワニー。




特殊合板の力強いフレームに、従来のものより長いステンレス・シャフトの強靭性が強力なバイブレーションを生み、重さも122g以下と今までより軽くなり、それがスピードとパワーの素晴しいバランスを構成し、ふりもシャープな一級品ラケットをつくりました。

No.β スワニー〈フレーム・カバー付〉 ¥3,800

☆お買い上げになりますとタオルグリップがついています。

大阪合繊株式会社
本　社・大阪市東区豊後町4 ☎(06)942-5816 代
東京営業所・東京都台東区鳥越1-26-1 ☎(03)862-6576 代

## 爆発的な打撃力を身につけよう

今度のトマス杯を、皆さん、ごらんになりましたか。日本の男子は惜しいところで敗れました。大接戦であっただけに、いろいろ勉強になりました。

その中でも一番、思い知らされたのは、口惜しいことながら前の卜杯の時と同様に打撃力の、差でした。

スマッシュの爆発力が〝七難〟をかくす——言葉を換えれば配球、各種のストロークに損色がなくとも、最後の詰めのところで〝なぐり負け〟したのでは、結局、寄り切られてしまう、ということです。

まともにフレームの中心に当っていても、一発でシャトルがつぶれるくらいのなぐりこみをかけられると、その威力に圧迫されて、他のストロークが大変やりにくくなる経験を、皆さんも持っておられるでしょう。

「打たれるな?」と思うと、どうしても、そのリターンに気がとられて、足や体が固まってしまいます。逆に、相手からスマッシュを打たれても「さあ、いらっしゃい」とリターンする自信があれば、他のストロークも、いつものように使いこなせて、逆襲のチャンスをつかむことができます。

しかし、このスマッシュの爆発力は、ただ力いっぱい、ぶんなぐればよいというものではなく、そこには、いろいろな条件があります。

第一に、すぐれたアンティシペーション（予知）によって素早く、相手の浮いたフライトの下に躍り込む必要があります。

# 絶対にリキまず

## フォロースルーを短かくしよう

日本協会競技力向上委員長　伊藤基記

これが遅れると体が伸び切ったり、体全体のバランスが微妙にくずれたりして、力が脱けてしまいます。

第二に、強打するからといって、絶対にリキんではいけません。なにくそ、やってやるぞ、とリキめばリキむほど、不要の筋肉に力が入って、打撃に必要な力を殺してしまいます。

特に、肩に力が入りますと、スイング自体の起点に潤滑油が切れた状態になり、スピードが抜かれてしまう結果を招きます。

このように、リキむのは、どこをとっても、よいところがありません。大ゲサな構えやスイングで、ネットの向う側の相手をおどかすことは、効きめがない上に、こっけいでさえあります。

第三に、リキむことと関係の深いことですが、フォロースルーが不当に大きく、長くなることについては、かねてから気をつけて、クセにならぬようにしておくことです。

一発で決まればよいが、速いフライトは、相手の早いリターンを誘発します。リキんでしまってフォロースルーが長くなり体勢がくずれたところを、逆に衝き返される光景は、バドミントン・ゲームの随所に見られます。

第四にフットワークです。打球直後に（むしろ打球しながらといった方がよいかもしれません）前なり、側方なりに踏み込んでゆくフットワークが〝伴走〟しなければ〝とどめ〟を刺すことはできません。

第一発で半殺し、二発目でも効かなければ、第三発で…（言葉使いの荒っぽいところは、かんべんしてもらって）という、追い打ち精神が必要です。

このように、アンティシペーションからフォロースルーまで、いわゆる全力を出すわけですから、連続するスマッシュは、体力のいちぢるしい消耗をともないます。これに慣れておくことが必要です。

そうして、この全身をムチのようにうまく使って、ひっぱたく力は、幼少の頃から、いろいろのスポーツに親しんでおくことから生れてきます。特に、投げたり、打ったりする体のこなし、眼のつけどころ、足さばき等に慣れておくことが大切です。

大人になってから急にあわてひっぱたいても、肩や手首を痛めるのが関の山です。ラケットを振る、打つというのは、単なる力でなく、その力を効果的に生かす〝技術〟が大きいウェイトを占めます。そのコツをつかみ、急場に直面しても、あわてないためには、練習の積み重ねによる〝慣れ〟が必要となるのです。

また、筋肉の力で打つということよりも、内臓の力で打つというくらいの気持ちが大切で、胃腸の弱い人は大成が望めません。

たくましい食欲、強い意志と柔軟な気持ちと体のこなし、するどい神経が、これを可能にします。仕上げの段階では、多少シャトルの消耗が激しくとも、これを押し切ることが必要でしょう。

## プレーヤーへの手紙・河村選手の巻

# いち早く使った水鳥球

## 社会人になっても伸びた研究熱心さ

前日本教職員連盟常任理事　三須徳次

昭和46年の全日本総合選手権大会ダブルスで、決勝に進出した河村・今泉組のうち、今回は河村選手の登場です。

今年の10月に東京で行なわれた、トマス杯アジア東地区決勝戦で、マレーシアが世界に誇るウン・ブン・ビー、ピー・グナラン組やタン・アイク・ハン、ウン・タット・ワイ組を破った今泉・本間組の今泉選手については、よく知られておりますが意外に河村選手が強くなった今日までを、知らない人が多いようです。

今泉選手のダブルスにみがきをかけたのが、高校で先輩だった河村選手なのです。ダブルスで今泉選手を引っ張ったポイントは後述することとして、紹介から始めます。

河村博之選手（高岡市役所勤務）バドミントンは中学3年間、高校3年間、社会人になって7年間と豊富な経験をもっております。身長170センチ、体重66キロ、高校時代は一日3時間の練習を毎日やっており、クラブでのトレーニングは、フットワーク、ロードワーク、ダッシュ、腹筋を、自分だけのトレーニングは、ロードワークをしていたそうです。

高校時代の戦績は全国高校選手権大会で、ダブルス、シングルスともに2位と実力はあったのですが、社会人になってからはあまり注目されませんでした。だれでも社会人になりますと、仕事の関係で満足に練習ができませんが、いかにバドミントンができるか、というよりも、どんなに食費に消えてしまいます」と言っておりましたが、遊びたい年頃なのに、よく熱心にバドミントンを続けているなあと感心しました。

そのT君は社会人になってから、めきめき腕をあげてきました。日本のどこかに、T君のような人たちが大勢いると思います。バドミントンをやっていれば、生理的に体力が衰えない限り、プレーに関しては大丈夫ですから、途中下車しないで頑張ってください。

河村選手の研究熱心な面として、私の記憶に残っていることは、彼が高校3年生の時に出場した、全日本総合選手権（会津若松）での活躍があります。

この大会で、正式に水鳥球が使用されると聞くと、今迄の陸鳥球をやめ、当時としては入手困難な、そのうえ珍らしがられていた水鳥球を、躊躇することなく、試合に備えて練習に採り入れたことです。

その結果、全日本学生選手権大会で優勝した大学生を、見事に破っております。中学・高校と6年間も陸鳥球で練習していて、急に水鳥球を使用することになっても、すぐにはなじめなかったはずです。

ほかの出場予定選手も、その時は陸鳥球と水鳥球の飛行性における相違は、五、六名の国際試合経験者以外は知りませんでしたから、実際に水鳥球で試合をやることになっていても、実感がわかず、半信半疑で、陸鳥球と水鳥球の両方を、練習で使用していたようです。

河村選手が全面的に練習で水鳥球を使い、飛び方の研究をしていたことが、檜舞台で番狂わせを演じ、その試合をきっかけとして、彼自身が一層バドミントンに対して興味を持つことになりました。

卒業後に高岡市役所へ勤務し、練習を続けている状態は、次回に載せますが、現在は主将の重責を負いながら、自発的に脚力と腹筋の強化を欠かしたことがなく、練習も週に四日あり、一日2時間と比較的恵まれております。

高校の時からシングルスより、ダブルスが得意だったようです。そのダブルスも守りの型で成功はしておりますが、攻撃面が充実すれば、完全なダブルスになります。

河村選手がレシーブ型であっただけに、パートナーの今泉選手は試合ごとに、肌でダブルスの妙味を覚えられたのです。両者が強打者で、そのうえ好守備のダブルスでしたら完璧ですが、バド界NO35で述べましたように「ダブルスは経験者と組んで覚えてゆくのが早道」です。

河村・今泉両選手とも、経験者に違いありませんが「どんなにスマッシュを受けても、河村さんと組んでいれば、全部返球してくれるのだ」という安心感がパートナーにあったことや、ラリーを長く続けた試合内容が、知らず知らずのうちに今泉選手の経験となり、引っ張られてダブルスを覚えこんだポイントだと想像できます。

（続く）

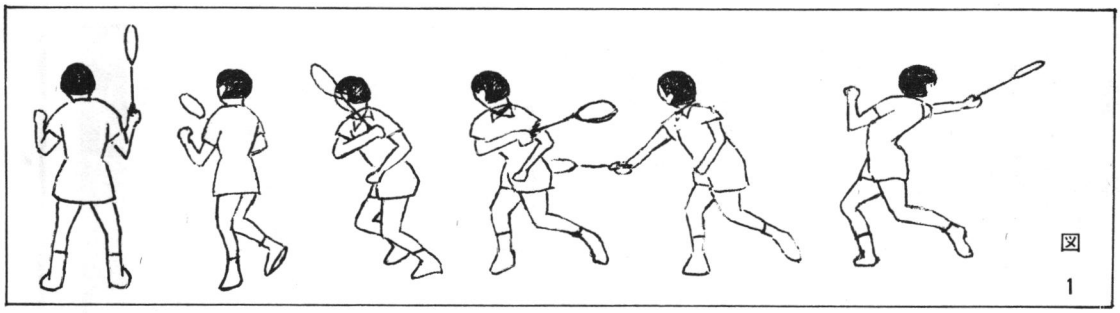


図1

## バックハンドをマスターする（続）

# 大切なヒジと手首の動き

### ＝＝要領は“巻きつき、巻き戻す”＝＝

### スイングの原理はフォアハンドと同じだが

バックハンドを使ってのストロークに関しては、前号で①グリップをもう一度、点検する必要がある②初心の段階では無原則な多用を注意する——の2点について述べました。

しかし、バックハンドは、いずれマスターしなければならないものです。そして、日本では初めにバックハンドを教えることが少いため、いいかげん、プレーが上達した段階になってもバックだけは一人前に打てず、外人にくらべ、それがプレーの上達を妨げる傾向がある、ということも事実です。当然、しかるべき段階で覚えておく必要があります。

バックで打つということは、背中を相手に向ける、従って視線が相手の動きを、フォアのように直接的に捕えられない、打つのに力がはいりにくい、フットワークがむずかしい、等々、フォアハンドの場合と根本的に異る点がいくつもあります。

しかし、スイングの原理はフォアと同じであり、バックはフォアの裏返し、と理解しておいてもらえば結構です。原理については、前号までに掲載されたこの講座を、もう一度ひっくり返して読んで見て下さい。

というわけで、バックハンド・ストロークにも、打点の位置によって、やはり三つの種類があります。

①ハイ・バックハンド（左肩＝右利きの人の場合＝上方に飛来したシャトルを処理する）

②バック・サイドアーム（左脇方面にドライブ気味に飛来したシャトルを捕える）

③バック・アンダーハンド（どうしても追いつけないため止むを得ず下方でシャトルを打ち返す）

以上の三つです。それではバックハンドによる各ストロークの要点について述べてみましょう。

**ハイ・バックハンド・ストローク**

相手に先手をとられ、フォアに詰められた後に、ひゅっとバックサイドに配球される。こんなとき、バックステップして、ラウンド・ザ・ヘッド・ストロークで捕球しても間に合わないと判断した場合は、このハイ・バックを用いなければなりません。

フライトを追いながらのフットワークは、まず右足を、左足の左側方へ踏み出します。ですから、これにつられて上体も必然的に左側方を向くことになります。

そして、ラケットはグリップが左肩口あたりに来るように引きつけて掲げ持ち、ついで、左肩を思い切り後方に引きながら右肩を、左肩を追いかけるように回り込ませます。要するに、上体がぐるっとひねられた状態になるわけです。

この時点では、重心は完全に左足から右足に移行してしまっており、ヒザはバネを利かせて軽く曲げ、やわらかく保っておきます。上体は完全にネット（相手）に背を向けたかたちになっています。

もちろん、これらの動作を継続させている間も、目はシャトルから絶体に離してはいけません。上体がねじられても、顔はできるかぎり相手（シャトルの飛行線）に向けて保つこと、これが一番むずかしいことなのです。

そしてシャトルの落下を待ち、タイミングをとり、打点を定めて、上体とヒザのバネを思い切り利かせて、ラケットをスイングさせ、ヒジが真っ直ぐに伸び

切り、最も高い位置でシャトルを捕えます。

インパクトの瞬間、ぐっと手首をそり返らせ、フォロースルーに入ります。足は上体の動きにつれて、今度は元の方へ向き直るように戻ります。

これら一連の動きは、模型飛行機のプロペラのゴムを、思い切り強く巻き、パッと離すと、きりきりと絞られたゴムが逆回転（復元作用）をはじめる、この作用を連想させます。巻きつき、巻き戻す、これがバックハンドに共通の、からだの動きです。

この場合のポイントとして、以来、本誌の講座で佐藤茂雄先生が記したように、インパクトのとき、親指の腹でグリップを押すようにして、手首を思い切り、そり返らせることが大切です。（**図4**）

**バック・サイドアーム・ストローク**

ドライブ気味のフライトや、シャトルの落下が早く、ハイ・バックで捕えられなかった場合このストロークを用います。

要点はハイ・バックと同じようなものですが①巻きつき巻き戻す動作が、ハイ・バックのときより入念でなければならないこと②巻きつけるときに、深く曲ってくるヒジを、巻き戻しの段階で、スピーディにはじき出すように振り出すこと③この動作のとき、腕をいくぶん体の前の方に延ばすようにすること、つまり、巻き戻しのえがく弧線が出来るだけ体から離れたところで、大きくなるように心掛けること――が大切です。

たとえていえば、左腰に差した刀を、居合いのように、抜き放しざま、一刀のもとになぎ払う、あの要領です。

フォアハンドの場合には①ヒジがのび、肩・腕・ラケットが同一線上に並んだ時点（**図2の上の実線部分**）でラケットの打面がシャトルを捕えます。

そして②ほとんど同時に、うしろにそっていた手首が内側に深く食い込む（スナップをきかす＝**図2の下**）③そのまま自然に腕が振り切られてフォロースルーに入るわけです。

実は、この②と③の間に、ヒットしたシャトルに加速を加えパンチを与えるための、重要な動作が行なわれています。それは、手首を曲げるにつれて、ヒジが自然に曲がることです。（**図2上の斜線部分**）

ところが、バックハンドでは動きが逆ですから、手首とヒジの動きもさかさまになり、明らかに、インパクトで加える力がフォアに劣ります。（**図3**）

バックハンドでのスイングの分解は（**図1**）の通りです。フォアとの大きな違いは、巻きついて曲げられたままのヒジがラケットをリードしていくことです。

バックでも、ヒジと手首の動きが、インパクトに大きな力を与えることは変わりませんからこの二つの部分の筋力、とくに手首の返しのための力、を十分に養成しておくことが重要で、フォアでも非力な人は、バックを振ると、なおさらみじめなことになります。

失念するところでしたが、バックハンドでも〝腰〟は大切です。上体をひねり、巻き戻す動作の中心はあくまで腰であり、パワー半減の腕の力を補うためには、フォアの時にも増して腰をよく入れることです。

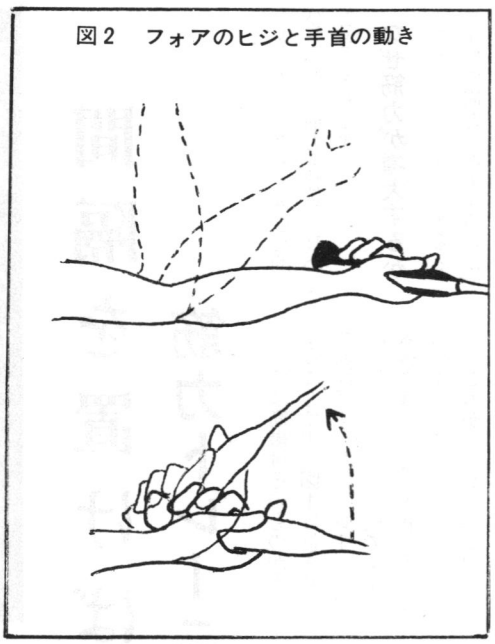


図2　フォアのヒジと手首の動き



図3　バックの手首（下）上図のような動きはあり得ない

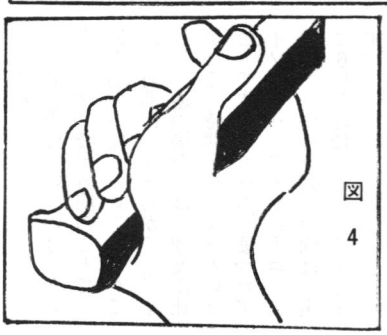


図4

初歩からの体力づくり

# 間隔を置けば効果はない

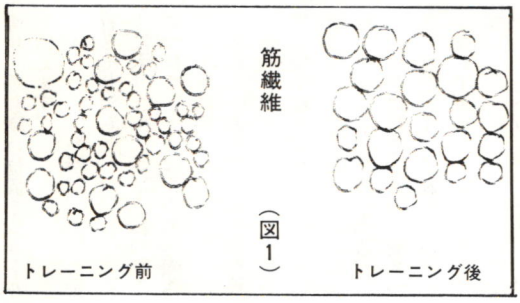
## 筋力トレーニングに三つの条件

―百万人のトレーニング入門―④

トレーニングの大きな目的のひとつは、筋力を強め、高めることにあります。

### なぜ筋力が増大するか

では、トレーニングすると、どうして筋力が増大するのか。そのメカニズムには、二つのわかりやすい説明があります。



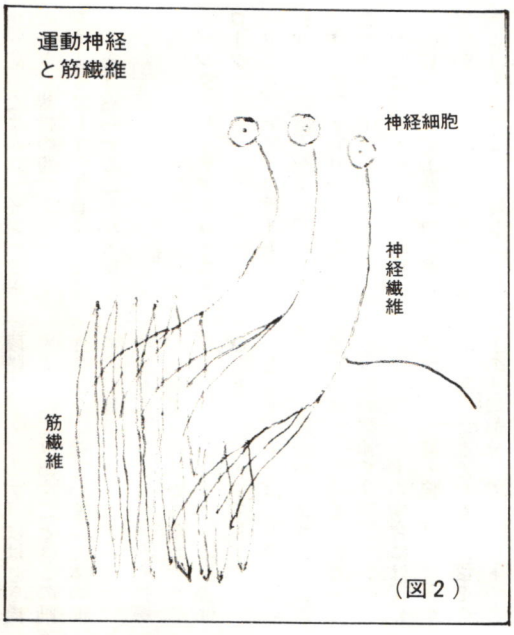
（図1）

一つは筋繊維そのものが太くなることです。**図1**は筋繊維の断面図です。左はトレーニング前（してない）の状態ですが繊維には太いものと細いものが入りまじっています。

ところが、トレーニングしたあとの繊維は、右図のように、みな、似たように太くなっています。もちろん、無限に太くなるわけではありませんが、一定の太さまで成長し、全部がほぼ等しい太さになると、あとは太くなりません。個人差もありますが、太くなれば筋力が増すのは当然です。

もう一つは、筋繊維を支配している運動神経の働きがよくなることです。**図2**でわかるように、運動神経の繊維の先はこまかく、千本にもわかれて、筋繊維にからみついています。

つまり運動神経が興奮すると千本もの筋繊維を一度に働かせるわけですが、トレーニングで筋繊維が太くなっていれば、一時に働く筋力の量も多くなる道理です。



（図2）

### 強さ、時間、頻度

筋力をトレーニングによって増大させるには、強さ、時間、頻度、という三つの条件があります。

強さの条件にも二通りあって①最大筋力を使うトレーニング②最大筋力以下を使うトレーニング、に分けられます。①は自分の百%近い力を出してやる筋力トレーニングで、これはアイソメトリック・トレーニングという方法でやります。これについては別に述べます。②は一つの運動を何回か反復するやり方です。サーキットのようなものは、これに相当します。

時間の条件というのは、トレーニングに費す時間のことで、最大筋力を使うトレーニングでは、時間はうんと短かくしてよいし、逆の場合には、強度に比例して、時間を長くするということです。最大筋力を使ったアイソメトリック・トレーニングでは、一つの運動の時間は、実に6秒から12秒ていどですみます。

頻度の条件というのは、一週間に何回やるか、やればいいかということです。

**図3**がそのことを説明しています。図のタテ軸は筋力の増加率、ヨコ軸はトレーニング間隔（日）です。ヨコ軸の5というのは五日に一回トレーニングする、という意味です。間隔ゼロというのは、毎日トレーニングする、ということになります。

### 二週間に一度ではやるだけムダ

この図を見ると、一日置きのトレーニングは、毎日と変わらず、百%の効果があがりますが二日おきになると急激に効果が落ち、五日に一度で五十%、二週間に一度ではゼロで、やるだけ時間のムダ、ということにな

ります。つまり、筋力を増大しようと思ったら、一日おきには同じトレーニングをしなければいけないわけです。

以上、強さ、時間、頻度と、三つの条件をうまく組み合わせ自分に必要なトレーニングを具体的に組み立てることが必要です。

次に**図4**を見て下さい。これは、筋力トレーニングをした効果が、どのぐらいかかって現われるか、また、止めてしまったらどうなるかを示しています。

Aの例は毎日トレーニングを20週続けたケース。つまり20週で最大の効果を発揮しますが、そこでトレーニングを中止すると、急激に効果がなくなり、止めて30週（半年余）すると、もとのモクアミになります。

Bは最初、毎日やっていたトレーニングを、あとで毎週一回に切り替えた場合、Cは週一回ずつ、50週も続けた場合です。いずれの例も、上昇率（効果）はさほどでない代わり、トレーニングを中止しても、急激には筋力がダメになっていません。

## 二十歳前後が最も効率高い

さて、次は**図の5**です。何歳ぐらいのときにトレーニングすれば、筋力増大の効果があがるか、を表わしています。これは説明の要もないくらい、はっきりしていますが、多少、年をとっても、トレーニングすれば効果があるのですから、あきらめないことです。女子の筋力トレーニングの効率は、男子に較べかなり低いのですが、これはホルモンの差によるのだそうです。

# 身体一つで出来る強化法

## わずか6秒　アイソメトリック

次に、今回は、やさしくてお金も手数もかからず、効果がもっともあがる筋力トレーニングの話をサービスしましょう。それは、さきほど出てきたアイソメトリックというトレーニングです。

ドイツのスポーツ学者ネッカーは、筋力の説明の中で「筋力には動的筋力（瞬発筋力）と静的筋力（ふつうの筋力）の二つがある」といっています。

むずかしい理論は抜きにして要点だけ説明しましょう。このトレーニングは、固定して動かない物体を、全力をこめて押したり上げたり（もちろん動かないが）の運動をやるもので、一旦とった姿勢を変えないところがミソです。

繰り返すと①固定した物体に対し全力を出し切る②6～12秒間③一週に3～5回でよい④一定の姿勢をとり続ける——ということを守って下さい。

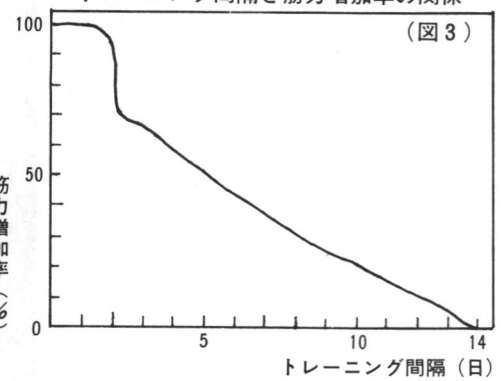
具体的なやり方として、一番いいのはトレーニング・ジムなどにあるバーやベンチプレスのようなものを、高さを調節して使うことです。

たとえば、立ってアゴの高さにバーを固定し、両手でバーを握り、それを押し上げるかっこうをする、逆にバーを低くして引き上げる姿勢をとる、などです。やり方しだいで、腕、肩、背筋、腹筋、太腿すべて強化できます。

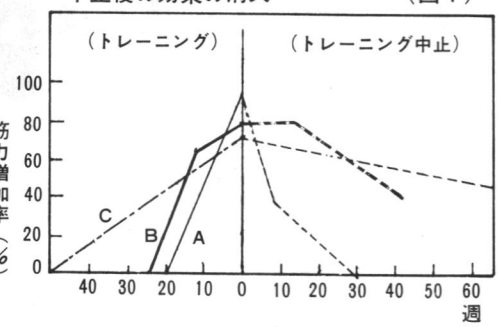
しかし、こんな器具がなくとも、鉄棒でもよいし、カモイを下から押し上げるのでも、窓のレールの台を上から押しつけるのでも、相撲の押しのように、カベに両手を全力で押しつけるのでも、考えれば、いくらだって方法はあります。

もっと単純には、拝むようなかっこうで、両手のヒラを合わせ、ぐっと押しつける、両手の指先をからませ引っぱる、両足をのばし、足首をからませ全力を入れて突っぱる……さっそくやってごらんなさい。

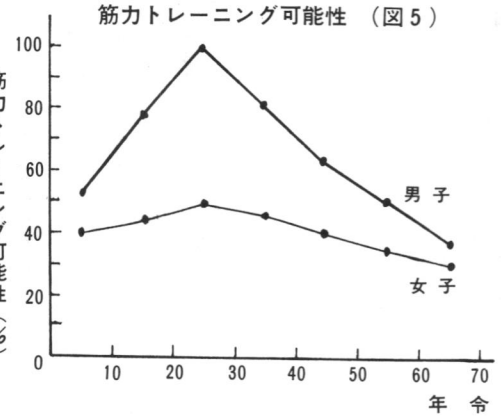
トレーニング間隔と筋力増加率の関係（図3）




筋力のトレーニング効果とトレーニング中止後の効果の消失（図4）




筋力トレーニング可能性（図5）



大会運営規定100問集

《連　載》　第2回

# 大会ごとにも独自の細則必要

## 協会年次大会（主催）は九つ

**問7**　もし、どうしてもこの規定通りに運営できない点があるときには、どうしたらよいのですか。

**答**　その場合には、その点を大会要項にはっきり書き入れておくことが必要です。

ただし、要項に書いておけばなにをどうやってもかまわないわけではありません。規定通りにできない正当な、またはやむを得ない事情があり、その上、それに代わる方法が規定の趣旨に沿うものであることが必要だと考えます。

**問8**　この規定は80条もあり内容もなにからなにまであるように思いますが、これさえあれば、どんな大会の細かい点でもあてはめることができるのですか。

**答**　いやいや、そうはゆかないですね。ですから、大会ごとに、必要があれば、特別細則を決めなければなりません。これを大会ルールといいます。

大会ルールは、その大会の要項に書いておくか、または競技の始まる前に、その大会の競技委員長から参加者全員に、はっきり伝えることが必要です。

普通は代表者会議とか開会式とかに口頭で述べます。このさい、もし会場ルールがあったときには、これは審判長から伝えられます。会場ルールについては、のちほど、またお話ししましょう。

**問9**　日本協会の主催する大会が、どこかの県で開かれたときにですね、その県の協会の役員が一生懸命にお手伝いをされるようですが、あれはなにか規定があるのですか。

**答**　日本協会の主催する大会は、前にお話しました日本協会の加盟団体が主管する場合が多いのです。これは日本協会の総会で決められます。

そして、日本協会からの大会開催依頼状を受け取ったのち、その加盟団体は日本協会へ次の書類を提出します。

①大会主管受諾書②大会要項案③大会運営企画（役員、審判員、会場、宿泊計画など）④予算書。

すると、日本協会の競技委員会でこれをよく検討し、総会の承認を得るという順序になります。また、大会が終わったあと主管団体は日本協会に次のような報告を提出します。

①申込み書綴②競技記録（5通）③決算書④優勝杯授与簿

なかなか面倒なものですね。しかし、この手順を完全にしておかないと、大会中に思いがけない行き違いが起きたり、また何年か経って「あのとき優勝したのは、だれだったか」わからなくなったりするかもしれません。

それから、運営企画や予算、決算書は次の大会開催のためにも、大変よい参考になりましょう。

### (2)　大　会

（規定第4条―6条）

**問10**　日本協会が毎年開く大会はいくつあるのですか。

**答**　日本協会が主催または主管する年次大会は九つです。ただし、世界招待大会はまだ一度も挙行しておりません。

九大会の名称と略称をいってみましょう。略称といっても正式の略称がこれです。略式の略称を新しく発明したりしないことですよ。

①全日本総合バドミントン選手権大会（総合大会）

②全日本社会人バドミントン選手権大会（社会人大会）

③全日本実業団バドミントン選手権大会（実業団大会）

④全日本教職員バドミントン選手権大会（教員大会）

⑤全日本学生バドミントン選手権大会（学生大会）

⑥全国高校バドミントン選手権大会（高校大会）

⑦全国中学生バドミントン選手権大会（中学生大会）

⑧国民体育大会バドミントン競技（国体競技）

⑨世界招待バドミントンリーグ戦（世界招待大会）

**問11**　インターハイとかインカレという言葉がよく使われますが、これはどの大会に当たるのですか。

**答**　インターハイは（Inter-High School）インカレは（Inter-College）のことです。インターハイは高校同士の試合を行なう大会、インカレは大学同士の試合をする大会です。

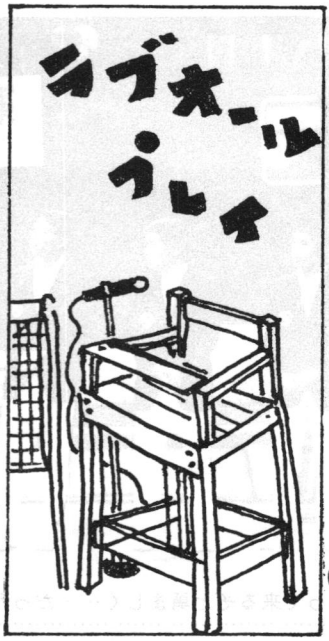
ですから、ある県のインターハイや、ある地区、たとえば関東のインカレがあるわけですが日本ではインターハイもインカレも全国大会にだけ限って考えているようですね。つまりインターハイは全国高校大会、インカレは全日本学生大会の別名ということになっています。インター杯大会などと思い違いをしないようにして下さいよ。

**問12**　総合大会というのは前にはありませんでしたね。

**答**　ええ。昭和二十二年度から始められた全日本バドミントン選手権大会が昭和35年の大改訂のときに、発展的に解消して総合大会になったのです。それまではオール・ジャパンと呼ばれ、それで通っていたのですが実はオール・ジャパンつまり全国大会は、どんどんふえて、現在では八つの大会があるのですから、やはり総合大会といわなければ、はっきりと区別できません。

（続く）

# よく使われるバドミントン用語⑤




## タ行の項〈続き〉

**ドライブ（Drive）**
シャトルをネット上すれすれに水平線をえがいて飛ぶスピードもある強烈なショット。前・中陣での攻撃に効果がある。

**ドリブンクリア（Driven clear）**
ドライブ性のクリア。相手がのばしたラケット上を抜くようにしてバックコートを襲う。スピードがあり放物線をえがく。

**ドリブン・サービス（Driven service）**
サービスの中で最も威力があり有効なフライト。ネット上端に触れるぐらいの高さで直線的にシャトルを飛ばす。スピードがともなわなければ効果が半減する。ふだんのサービス位置より、やや下がりめでないと、うまく入れることはむずかしい。

**ドロップ（Drop）**
落下すること。シャトルがネットを越えた次の瞬間、失速して急速に落下するフライト。シャトルが打面に接触した瞬間、腕の力を抜き、手首の力で押え込むようにする。フォロースルーしないことが大切。72年ユ杯代表の高坂薫（青学大→佐渡汽船）の武器として有名。かつての名手ソネビル（インドネシア＝現IBF会長）がうまかった。

## ナ行の項

**ネットフライト（Net flight）**
前陣、とくにネットぎわで打たれる近距離フライト。ネットの高さすれすれに、ネットに平行に飛ばす打球と、ネットと直角（サイドラインに平行）に打つのと二通りある。ネット・ショットともいう。

## ハ行の項

**ハイクリア（High clear）**
できるだけ高く打ち上げ、相手の後陣（バックバウンダリ・ラインあたり）深く落とすクリアの一種。強いインパクト、スピードが要求される。
相手を後方に押し込め、自分が前陣で有利な展開の場をつくるための基本ストローク。後陣の二角を執ように攻め、相手を走らせることが必要。

**バックコート（Back court）**
コートの後方、とくに二本のバックラインの間、およびその付近の区域。一般的な意味で後陣を指す。

**バックバウンダリ・ライン（Back boundary line）**
コートの最後方に、ネットと平行に引かれた白球。ネットの後方6メートル70に引かれたラインがシングルス、それより前方76センチの白線がダブルスの最後尾境界線。ともにサービス区域を示す最後尾のラインでもある。

**バックハンド・ストローク（Backhand stroke）**
右利きの選手の場合は身体の左、左利きでは右側に来たシャトルを打つときのストロークの総称。単にバックハンド、あるいはバックともいう。ラケットの打面の、フォアハンドの場合の裏に当たる面を使う。つまりラケットを握った手の外側、甲の部分の延長上にあたる面でヒットする。

**バードフライト（Bird flight）**
バード（小鳥）はシャトルコックの愛称。シャトルの往復が白い小鳥の飛び舞うさまに似ているという連想でつけられた。バードフライトは、従って、シャトルがえがき出す飛行線のこと。

**ハンドアウト（Hand out）**
ダブルスで、一人がアウトになった状態。ダウンと同じ。

**ハンドイン（Hand in）**
サービスする側。インサイド（または単にイン）のこと。

**ピボット（Pivot）**
軸足旋回。片足のかかとをあげ、足先を軸にして、身体の方向を旋回するように変える（その動作）実際には頭と両肩から先に回転運動が始まる。

**フェイント（Faint）**
あざむくこと。相手の逆を突くこと。相手の次の位置どり、攻守の意図を予測して逆を突くこと。方向とタイミングを狂わせるのに有効。熟練したプレーヤーは、よくフェイントを活用して相手を窮地に追い込む。

**フォアハンド・ストローク（Forehand stroke）**
バックハンドの逆。順手ともいう。右利きなら身体の右側、左利きなら左側に飛んできたシャトルを打つ打法の総称。ラケットの打面は手の内側（手のひら側の延長サイド）の面が使われる。
本来バックハンドのサイドに来たシャトルを、フォアハンドで打つ場合は「フォアにまわり込む」という。（続く）

前ページで紹介、連載している大会運営規定100問集は、一部百八十円（送料別）でお求めになれます。百万人のプレーヤー必携の書として、一冊、座右にお備え下さい。
◎申し込み先
東京都練馬区旭丘一の五一
日本教職員連盟、前田耕作方




勝って来るぞと勇ましく……だったが（ト杯開会式から）右端が板垣監督，その左宮永コーチ

# マレーシアに手は届いたが…

## 敗軍の将，あえて兵を語る

日本協会競技力向上委員長　伊藤基記

## ト杯戦、反省と今後の課題

### 勝てば官軍、負ければ賊軍というけれど

勝てば官軍、負ければ賊軍、という。日本は必死の追い上げむなしく、ト杯戦でマレーシアに敗れ去った。結果論でいえば試合の成り行きからして、勝つチャンスもあった。しかし現実は現実。日本は負けたのだ。死んだ子の年を数えるのは親の愛情だが、スポーツの世界はつねに前向きでありたい。大切なのは、敗戦から何を得て今後に生かしていくかだ。

男子ナショナル・チームを編成したのが71年暮れ。72年正月早々、まるで寒中げいこのような仙台合宿に始まり、三月上旬甲府、四月・上尾、六月の塚口（三菱電機体育館）九月同じく塚口、仕上げの九月下旬から大会まで——都合六回の合宿をもって、ト杯アジア東地区決勝に臨んだ。

仙台から甲府までは競技力向上委の合宿、上尾以後は監督、コーチの下で、チーム固めの合宿を行なった。担当委員長としては誠に申しわけないことだが大学の方の仕事と重なって、仙台と二度目の塚口合宿にしか顔を出すことができなかった。

しかし板垣監督、宮永コーチから各回、適宜の連絡報告があって、まれに見る結束と融和、希望と意欲の上に、着々とチームが磨きあげられていることは察しがついていた。

ダブルスも思い切った組み替えで本間と今泉、栂野尾と池田の新コンビに期待をかけ、ベテラン秋山、小島はシングルス一本にしぼった。結果としては板垣、宮永の両君が知恵をしぼった、この新しいペアを含むエントリーは成功であった。

六・四か七・三でマレーシア有利説も出ていたが、私はむしろ逆で、ひとアワ吹かしてやるぞと、内心期するところがあった。板垣、宮永両君も同じ気持ちであったと思う。

総決算として、僅少差とはいえ、敗れ去った事実。とやかくいう気持ちはさらさらない。実際、筆をとるだけで、血が吹き出ている傷口にさわられるような気がするのだから。

第一日目に秋山か小島のどちらかが、第二日の元気を出してくれていたら、とか、本間が14－9とマッチポイントを握りながら、グナランのダブルス的なぐり込み戦法のペースに捲き込

まれて、惜しいチャンスを逸したことの無念さは、生涯、私たちの頭から離れないだろう。

だが、しかし、マレーシアが実際に手の届くところに来ていたことは、観戦したものの敵味方、区別なく認めただろう。

日本男子の追い上げが急ピッチであることを、各国が目のかたきにしはじめるのは、もはや明らかである。ナショナル・チームとして一軍の強化に拍車をかけると同時に、二軍的なものの育成が急務と考える。

実際問題としては、職場の違うダブルスのペアの維持練習をどうするか。選手生活と職場の生活との調和をいかにはかるか、目白押しにスケジュールされる大会と、合宿の時間的配分をどうするか。どのようなカルテを選手の一人一人に与えるべきか。この辺に大きな課題が残されている。

# 前進のために、六つの提案

東京新聞　後藤忠弘

紙数が限られているので、感じたことの中から、ポイントだけを列記する。

**①出場試合の管理と制限**　ナショナル・チーム（が存続するという前提に立って）は日本協会直轄選手という本来の立ち場を貫く必要がある。即ちトップ級の選手が大小無数の大会に無差別に出ていることは好ましくない。

各県協会、職場、所属チームなどとのつめた話し合いが必要だが、最終的には、出場できる（してもいい）試合を指定、協会がコントロールすることが望ましい。

**②職場（大学、高校）とのコミュニケーション**　前項とも関連するが、あらゆる試合にも出て、合宿も海外遠征も、では選手が本業に従事する時間がなくなる。

協会が自主的にこれらスケジュールを管理する姿勢を示しつつ、当事者の所属責任者と十分に話し合い、理解を得なければならない。

この点はすでにト杯チームの中で問題の一つにあげられていたが、根本的に解決しているとは思えない。協会は、一片の文書で依頼状を出し、こと足れりではなく、じかに足を運んで〝お願い〟しなければ真の支持は得られない。

蛇足だが、ト杯終了後、これら関係筋に、感謝の手紙ぐらい送ったかどうか。

**③三度の合宿より一度の海外遠征を**　合宿のあり方については、後述するが、合宿を数多くするより、いくらかでもその費用を流用しつつ、海外へ選手を出す方が効果は大きい。当面の敵はインドネシア、マレーシア始め、東南アジアであり、積極的にこの方面と交流をはかり、若手を送り込みたい。

試合は監督、コーチでも、協会役員がやるのでもなく、選手がやるものだ。つまるところ、選手がどれだけ自主的意欲を燃やし、いわれなくても、みずから努力するかが、すべての出発点であり、ゴールでもある。

**④合宿のあり方に再考を**　すでに出来上っている選手を、合宿で根本的改造しようと思っても無理がある。大切なのは日常であるが、勤労者選手は、そのへんがむずかしい。課題を与え、その答えを実地テストするのはもちろん、再開合宿までにくわしい報告書をレポートさせる必要がある。

合宿の数が多いと選手に甘え、依頼心のスキが生ずる。自戒していても、とかくそうなるものだ。こちらから何でも教える、ではなく、みずから考えて、質問し、教えを乞う形にしたいものだ。

合宿はいわばゼミナール、あとは日常、自分で勉強するのが当然、というシンを貫く。

**⑤部外者との接触、交流を**　バドミントンの世界は、まだまだ小さく狭い。とかく〝井の中の蛙〟になりがちだ。他の競技の中には、同じような経験を乗り越えて成功した例、失敗した例が数限りなくある。

そうした選手や指導者の話だけでなく、スポーツ科学者、心理学者、外国事情にくわしい人、話題豊富なジャーナリストなど、つとめて各界の人々から話を聞き、交流する機会をつくりたい。

余分なことだが、代表選手たるもの日常英会話ぐらいは、当然、できなければならない。

**⑥トレーナーの常設と体力測定の徹底を**　仙台の初合宿から数次にわたって献身的努力をした渡部トレーナーが、最終的なト杯チーム・メンバーに加えられなかった。地元の日本でやる大会だから、そこまでしなくても、という考え方だったのかどうか。わずか一人分の費用をケチったとは思わないが、おかしなことである。

大体、バドミントンの世界にも何人かのすぐれたトレーナー（日本体育協会の講習と試験を受け、正規の資格をとった人）が何人もいる。しかし、それらの人々は、地元では大いに活躍しているだろうが、日本協会は一度も目を向けない。

何級の資格をもった人がどこに何人いるか、おそらく知らないだろう。これらの人々に活躍の場を与え、体力の向上、管理に当ってもらわねばソンである。ユ杯のときもトレーナーは最後にワク外だった。

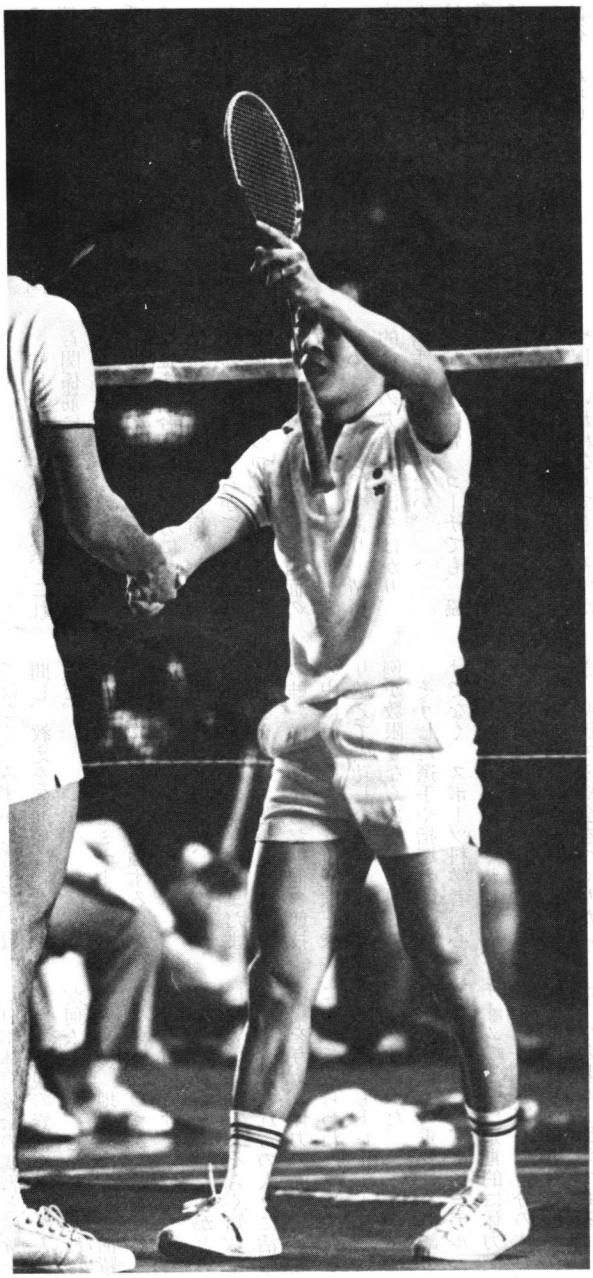
トレーナーの重要性を認識すること。そして、ナショナル・チームの選手は定期的に体力測定を受け、客観的な自分の体力、他との比較を認識すること。スポーツの基本は体力である。

# やっぱり“王者”はハルトノ

## 第1回世界招待（男子）選手権

## ダブルスもインドネシア組が優勝さらう

第一回世界招待バドミントン選手権大会が、十一月十二日から十五日まで、インドネシアの首都ジャカルタで開かれた。開催国の8選手をふくめ、欧米、アジアから計12カ国31人の男子が参加、単複2種目に王座をきそった。ともにアジア勢、とくに地元インドネシアが強く、シングルスは〝王様〟ルディ・ハルトノが決勝で欧州ナンバーワンのスベンド・プリ（デンマーク）をくだし優勝。ダブルスは同士打ちのすえ、インドネシアのワジュディ、チュン・チュン組が全英選手権優勝ペアのチャンドラ、クリスチャン組を破り優勝し、地元が面目を保った。



### 小島、今泉ともに涙のむ

#### 厳しかった30度余の暑天

日本からはトマス杯代表の小島一平（ヨネヤマ）今泉勉（高岡市役所＝富山）が参加した。しかし、ト杯対マレーシア戦、国体と続いた連戦の疲れのあとだけにベスト・コンディションといえず、途中で敗退した。

小島はクジ運悪く、準々決勝でハルトノ（インドネシア）と当たり、わずかに28分で一方的に敗れた。また、国際試合の経験が浅い今泉も、欧州でプリ（デンマーク）と一、二を争っているS・ジョンソン（スウェーデン）といきなり対戦、これもストレート負けに終わった。

ダブルスも即製ということもあり、西独のメイワルト、ブラウン組を降したあと、若い優勝ペアのワジュディ、チュン・チュン組に名をなさしめた。

もっとも、欧州、カナダ、日本は十一月半ばは冬。そこからいきなり30度を越す暑さのインドネシアに遠征したのだから、体調がよいわけはなく、厳しいコンディションだった。

この大会はインドネシアが総

力をあげて企画した感じで、シングルス優勝者にスハルト大統領杯、その他、IBFからのカップもあるなど、全英に代わる新しい世界選手権にしようとの意気込みがあった。また優秀な若手も多く、ト杯保持国の地力を見せつけられた。

**【招待出場選手一覧】**

▽**マレーシア**＝タン・アイク・モン、タン・アイク・ハン、P・グナラン、ウン・タット・ワイ（**4人**）

▽**シンガポール**＝ウン・チョウ・ヤウ、リー・キン・タット、ウィー・キン（**3人**）

▽**タイランド**＝バンディッド・ジャイエン、サンゴブ・ラタヌソルン（**2人**）

▽**インド**＝プラカシ、ナラ・スジャナ（**2人**）

▽**ニュージーランド**＝リチャード・バーサー（**1人**）

▽**カナダ**＝ウェイン・マクドネル（**1人**）

▽**西独**＝ロラント・メイワルト、ウォルフガング・ボショウ、ウィリ・ブラウン（**3人**）

▽**英国**＝エリオット・スチュアート、デレク・タルボット（**2人**）

▽**スウェーデン**＝スチュレ・ジョンソン（**1人**）

▽**デンマーク**＝スベンド・プリ、フレミング・デルフス（**2人**）

▽**日本**＝小島一平、今泉勉（**2人**）

▽**インドネシア**＝アムリル・ヌルマン、ライ・スミラト、ルディ・ハルトノ、チュン・チュン、ヨハン・ワジュディ、アベ・チャンドラ、クリスチャン、インドラ・グナワン（**8人**）




12カ国の国旗はためく大会プログラム

## 第一界世界招待選手権大会全記録

◇…男子シングルス…◇

▽**1回戦**

タンアイク（M）15—7 ウンチョウモン（S）15—10
ヌルマン（IN）15—13 ヤウ（S）15—10
パーサー（N）15—11 ジャイエン（T）15—13
ボショウ（独）15—5 メイワルト（独）15—3
S・ジョンソン（SW）15—12 プラカシ（I）18—13
ブラウン（独）不戦勝 今泉勉（日）15—4
サンゴブ（T）15—7 スチュアート（英）15—6
スミラト（IN）15—4 デルフス（D）15—7

▽**2回戦**

ハルトノ（IN）15—2 タルボット（英）15—8
小島一平（日）15—2 リーキンタ（S）15—3
グナラン（M）15—1 ウィーキン（S）15—4
プリ（D）15—10 チュンチュン（IN）15—10 15—9
タンアイクモン 15—10 ヌルマンボショウ 15—11
15—12 パーサー 15—11

S・ジョンソン 15—2 ブラウン 15—7
スミラト 15—3 サンゴブ 15—5

▽**準々決勝**

ハルトノ 15—3 小島一平 15—4
タンアイクモン 15—10 ボショウ 15—3
スミラト 15—9 S・ジョンソン 15—1
プリ 18—13 グナラン 15—5 13—18
ハルトノ 15—8 タンアイクモン 15—9

▽**準決勝**

プリ 15—7 スミラト 15—9 3—15
ルディ・ハルトノ 15—2 プリ 15—4

▽**決勝**

ルディ・ハルトノ 15—2 スベンド・プリ 15—4

◇…男子ダブルス…◇

▽**1回戦**

ジャイエン サンゴブ 15—6 15—12 タンアイクモン、タン・アイクハン 棄権
スチュアート、タルボット 15—6 15—4 ボショウ、スジャナ（I）
ワジュディ チュンチュン（IN）15—1 15—8 プリ、デルフス

小島一平 今泉勉 15—5 15—13 18—15 メイワルト ブラウン
チャンドラ クリスチャン（IN）15—6 15—0 ウンチョウヤウ、ウィーキン
ウンタット ワイ、グナラン 15—4 15—4 パーサー、グナワン（IN）
ジャイエン サンゴブ 15—2 13—15 15—5 タルボット、スチュアート
ワジュディ チュンチュン 15—8 17—14 小島一平 今泉勉

▽**準決勝**

チャンドラ クリスチャン 15—10 ジャイエン サンゴブ 15—10
ワジュディ チュンチュン 15—8 ウンタット ワイ、グナラン 15—8

▽**決勝**

ワジュディ チュンチュン 15—10 15—12 チャンドラ クリスチャン

（**注**）国名の略称は次の通り M＝マレーシア、S＝シンガポール、IN＝インドネシア、T＝タイ、N＝ニュージーランド、独＝西ドイツ I＝インド、SW＝スウェーデン、英＝英国、C＝カナダ、D＝デンマーク

# バドミントン教室開催が夢

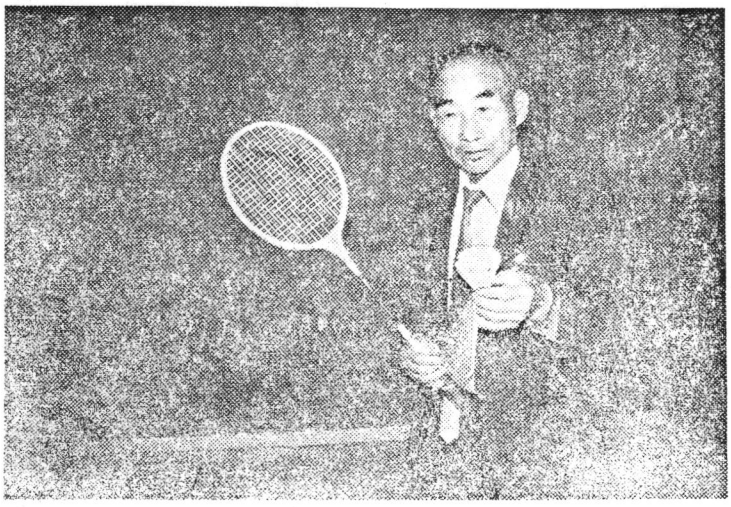
## 京都・亀岡市　81歳の日下部さん

## スポーツ普及に燃える情熱

老人はもっとスポーツを楽しもう――と京都府亀岡市の一老人が、お年寄りのスポーツ普及に力を入れている。八十一歳の高齢を思わせないハッスルぶりで、月に二回は必ず京都市まで出かけ〝スポーツ教室〟に参加する若々しさ。「地元でバドミントン教室を開く」のが夢だそうだが、まさに〝恍惚の人〟よさようなら、というところ。同市老人クラブ連合会長、日下部平三郎さん＝農業・同市東本梅町中野＝が話題のヒーローである。

（毎日新聞）

## “恍惚の人”よ、さようなら



日下部さんは、この春、老人クラブ連合会長になり「スポーツは若者だけのものでない」と老人の体力向上に、スポーツを採り入れることを考えた。ちょうど六月から府老連のキモ入りで、毎月、老人のためのスポーツ教室が開かれるのを知り、率先して参加した。

自宅から府立体育館（京都市北区大将軍）まで実に約五十キロ。バスに乗っての〝通学〟だったが、日下部さんは欠席ゼロの優等生。

この〝教室〟には卓球、輪投げ、ボール投げなどがあるが、日下部さんの〝専攻〟はバドミントン。手軽にスポーツ気分にひたることができるという考えからだった。

一回の練習量は、わずか四十分だが、青年時代にテニスの経験もあり、サーブ、レシーブなんでも…の上達ぶりに、講師の方が「とても八十一歳には思えない」と舌を巻くほど。最近では、十人のバドミントン級友と試合ができるまでになった。

現在、亀岡市から、この教室に通っているのは日下部さん一人だが「バドミントンをやっていると、年のことも忘れるし、ストレス解消にはもってこい」という日下部さんの話に、地元の老人たちも、しだいにスポーツ熱を高めている。

日下部さんは目下、市内の老人クラブに働きかけ、来年早々老人だけのバドミントン教室を開きたい、と考えている。将来は、クラブ対抗の競技会が持てれば…が夢。

「恍惚の人などという汚名をバドミントンで吹っとばしますよ」と、若者のような元気さで語っている。

## バドミントンの試合も

## 49年に大阪で中国博の計画

日中復交を記念して、49年春大阪で盛大な中国博を開く計画が進められている。これは大阪の財界人有力グループが推進しているもので、さる十月九日、関係者が大島大阪市長と会って協力を要望した。市長は「内容時期、会場等に検討の余地があるが全面的に趣旨には賛成」と述べた。

この博覧会は中国の歴史、現況などのほか、演劇、美術の上演、バスケット、バドミントンも予定されている。（毎日新聞）

### ひとこと

20年以上バドミントンをやっている。昭24ごろ運動具店の紹介でやってみたのが、上越地方での草分けとなった。現在、市のスポーツ教室や高校、職場のクラブで指導普及につとめている。少しの空地で遊べる楽しいものだが、本格的にやると庭球より激しい面がある。スポーツは激しい動きに変わりなく、汗をかいたあとのさわやかさは気持ちのいいものだ。（新潟県上越市佐内町、会社員・田中惣二さん、45歳）

（毎日新聞）

# 国から地方まで体育表彰さかん

## 天野辰雄氏（広島県会長）が晴れの藍綬褒章を受賞

スポーツに功績のあった人に贈られる紫綬、藍綬褒章の受賞者が十月七日決まった。

バドミントン界では広島県バドミントン協会会長・天野辰雄氏(六二)が、藍綬褒章の栄に浴した。このほかのスポーツ界褒章受賞者は日本アマ・ボクシング協会副会長（JOC総務主事）の柴田勝治氏、戦前の五輪マラソン入賞者・津田晴一郎氏など、全部で十二人。

**天野辰雄氏**　広島県バドミントン協会会長、広島県体協副会長、天野実業株式会社社長。

昭和二十七年から広島県協会会長となり、以来、毎年、国体に参加し、直接、選手の激励に陣頭指揮し、県下の各種大会や会議にも、精力的に出席し、県下バドミントンの発展に尽力してきた。

この件について広島県協会理事長・安倍淳美氏から紹介とともに「広い視野からバドミントンを見つめ、県内の普及発展に尽されたその功績に対して私達は深甚の敬意を表するとともに今回の受賞を心からお喜び申しあげるものであります」との言葉が日本協会あてに寄せられたことをお伝えする。

### 文部省の表彰も続々と

文部省による体育功労者、社会体育優良団体の表彰が、スポーツの日に先立つ十月九日、東京で行なわれた。バドミントン関係、次の通り。

**★栃木県河内町体育協会**　昭和30年4月に設置され、健康・体力づくりをめざし、二千六百人の町民総スポーツを展開。各地区にバドミントンなどの用具を配布し、一人一種目以上のスポーツを楽しむようにしたり、スポーツ少年団を結成して明るい町づくりのため「スポーツの町」を宣言している。

**★茨城県土浦市・高木彬氏**　本来は土浦市の軟式野球育ての親で、現在も県南支部長。しかし最近はママさんバレー、バドミントンを盛んにしようと、こまめに動きまわっている。

高木さんの話　スポーツは専門的なものではいけない。好ききらい、上手下手に関係なく、だれでも参加できるのが本来の姿だと思う。

**★大阪府・茨木市体育協会**　昭和23年発足、市民ぐるみのスポーツ振興に全力をあげてきた。ルールが簡単で手軽にできるスポーツを考案したり紹介したり。バドミントンも盛んに奨励している。

### 県下での表彰も盛んに

**★岩手県バドミントン協会**長・山本祐二郎氏(県体協表彰)

**★北海道室蘭市・山本朝雄氏**(昭26・市にバドミントンを導入＝市体協表彰)

**★北海道帯広市・帯広大谷高**二年、日山裕子(二七)全道バドミントン国体予選単、全道高校単複優勝(帯広市スポーツ奨励賞)



## 札宮さまも目下ご愛好

六歳になられた礼宮さまは、すこぶるお元気。おひまなときはバドミントンを楽しんでおられる。身長117センチ、体重21キロと標準を上回るご成長ぶり。セーターを着ていても、すぐ半袖シャツ姿になられてしまうくらいで活発。二男坊殿下らしくこのところ一段とやんちゃぶりを発揮されている。

学習院幼稚園の担任、高木良子先生は、そんな宮さまに「お庭のカシの木の上までとどくような元気な声が、きょうも聞こえます」と誕生カードをおくられた。来春には学習院初等科に進まれる。

動物がお好きなことにかけては、おじいちゃまの陛下も舌を巻いておられる。水泳、飛び込み、スキーと、スポーツはなんでも、この夏は、お兄さまの浩宮さまとテニスをされたが、バドミントンにくらがえされ、目下は白いシャトルを追うのに熱中されている。（読売新聞）

## 私もファンです

### "遊びベタ"左幸子さんの余暇活用法

そもそも私は"遊びベタ"なんだと思うのですが、マージャンやボウリングなどの遊びは苦手で、とくに賭けごとは本質的にハダが合わないんです。

（中略）食事のあと、バレーボールやバドミントンなどして遊ぶのですが、体を動かすのはとてもいいことですね。私も体を動かすのは大好きです。（東京スポーツ）

# 今月の言葉

**（ぼくは）負けても勝っても人のせいにはしない性格なんだ。人はそれを、きつい、というが、運を努力なり精神なりによって勝ち取っていくわけです**——日本シリーズでの勝負をきかれて、巨人軍の川上監督

お寺の鐘が鳴る。これは果して鐘が鳴るのか撞木が鳴るのかという、禅問答みたいな話がある。野球専門家でない筆者には川上監督がえらいから、日本シリーズで8年連続優勝という金字塔が樹立できたのか、それとも選手がすばらしいからなのかよくわからない。

もちろん、試合は選手がやるものであって、監督、コーチがいくら有能でも、選手がダメなら、やはりダメだ。しかし、巨人軍のような偉業を成しとげるチームでは、やはり、選手ばかりか、監督者も有能なのであろうと思う。

その証拠が、この冒頭にあげた語録の中にある。一つのことをいっているのだが、考え方は二つに分けて取り出すことができる。一つは「勝敗を人のせいにしない」という言葉、もう一つは「運もまた、自分の努力で勝ち取るもの」という一節だ。

さあ、ここで、読者諸氏よ、みんな一度、謙きょな気持ちで反省してみようではないか。はたして我々は、ものごとの結果が、悪くいった場合、それを他人のせいには、していないだろうか。

## 〝人のせい〟にするな
## 運も努力で勝ちとるもの

選手づくりのうまい指導者は勝ったときは「きみたちの実力で勝ったのだ」とほめ、負けたときは「私の指導が悪かった」と選手に頭を下げるものだという。

しかし、きみがもし、努力家研究家で、つねに自発的にものごとを吸収しようという態度の人だったら、指導者がプアであっても、意に介さないだろう。

そういう人にとって、世界はいつも無限の可能性をはらんだもので、期待に満ちており、自分だけが頼りであり、結果について責任をとるのは自分自身であることを知っているからだ。

反対に、きみが、つねに人によりかかり、人にしてもらわないとなにもできないし、やらない甘ったれだったら「おれがやったんじゃないや」ということになる。

要するに自分でやらぬ人間は他人ばかり気になるから、アラがよく見え、不満だらけで、人のせいにすることになる。

さあ、第一線選手の中にも、合宿の待遇が悪いだの、コートがどうだのとブツブツいう人がいないだろうか。

本当は、他人様の貴重なお金で練習させてもらえるだけでも有難いはずなのだ。審判が悪かったから、勝てなかった、などと、たとえグチにしろ、いってはまずい。

スポーツは、行為についての責任が、もっとも明確な人間の活動である。勝負の場は、選手が、どんな性格の人間であるかを、容赦なく見るものに知らせてくれる。

つまり、諸君は、実のところプレーではなくて、人間の値打ちを、観客に評価してもらっているのだ。人間がダメだと必ず近い将来、凋落する。

## 〈次号予告〉

次号は国体とインカレの詳報、二大特集その他
アマ問題など例月どおりの記事を満載です。

## 編集室

○…日昏れて道遠し、と思っていた中国との交流が、意外な時期に実現しそうになってきた。田中内閣の出現、両国の復交で、中国側の動きも変わってきたのだろう。しかし〝原則〟は絶対にくずさない。ここのところは、よくわきまえておく必要がある。草木もなびく、と単なる便乗ムードではいけない。

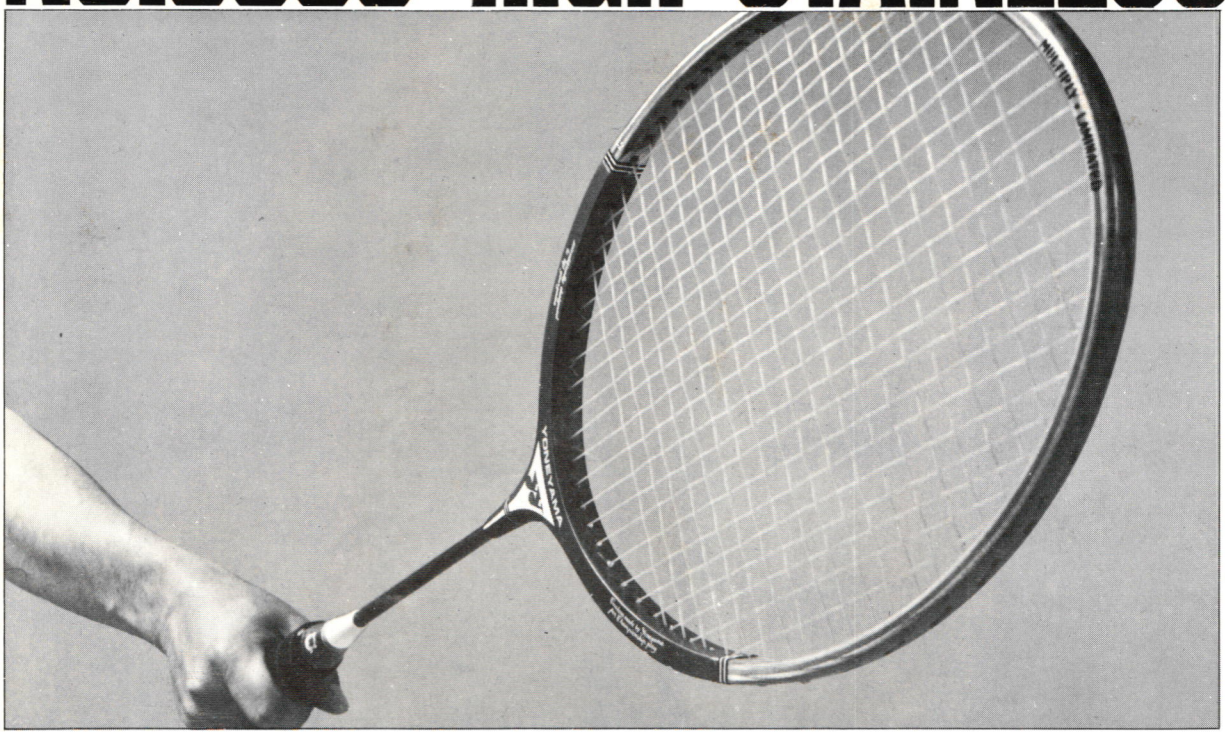
しかし、まずはよかった。

○…松平語録を前号に載せたと思ったら、とたんに、男子バレーのアマ違反問題なるものがおこってきた。アマ規定というものは、とかくむずかしいが、根本理念はごく単純だ。このへんを解説しながら、一連の問題を調べ、他山の石としよう。次号では、特集として、この点を考えていくつもり。

【バドミントン界】第38号
昭和47年10月25日　印刷
昭和47年11月1日　発行
編集兼発行人　川端昇市
発行所　東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話　四六七・三一一一（内線）二五一
四六七・七〇九五（直通）
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都豊島区南大塚二一二九
明宏印刷株式会社
定価　一部　百三十円

©無断転載を禁ず

# No.9000 HIGH STAINLESS




## 未知のちからを隠しもつ

## ステンレスのシャフト

しぶとい弾力。まったく鋭い切れ味。瞬間に炸裂する攻撃力。いままでのバドミントンラケットでは、とても出せなかった鮮烈なパワーです。シャフトにステンレスの特性を生かしきってありますから、難度の高いテクニックも思いのまま。これぞ、バドミントンを科学するヨネヤマの、新しい自信作です。その名をハイステンレス。その真価は、世界に点在する一流プレイヤーたちに問いたい。

No.9000ハイステンレス/¥3,800(フレームのみ)

ヨネヤマラケット

月刊「バドミントン界」第38号
昭和四十七年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
発行所 東京都渋谷区神南一ノ一ノ一 日本バ[illegible]

